

静岡文化芸術大学 創立20周年記念誌



SUAC

SHIZUOKA UNIVERSITY OF ART AND CULTURE 20TH ANNIVERSARY

静岡文化芸術大学

創立20周年記念誌



未来へつなぐ知と実践 SUAC20

知の拠点であり続けることを基礎に  
地域へ、世界へ

未来へつなぐ  
知と実践



# 未来へつなぐ知と実践

題字 有馬朗人



20周年記念ロゴ・マーク



未来へつなぐ知と実践  
SUAC20

池田 梨央 デザイン学部デザイン学科  
(2019年度卒業)

【デザインコンセプト】

ロゴ・マークのコンセプトは、「繋がり」です。浜松市や静岡県などの地域、さらには、日本や世界との「繋がり」。新しい発展への希望を込めた未来への「繋がり」。文化・芸術と卒業生の橋渡しとなる大学との「繋がり」。この3つの「繋がり」をコンセプトに設定しました。この「繋がり」をわかりやすく表すために、「20」をリボンで形づくりました。円は、枠を表すと同時に、日の丸もイメージしています。「20」が円を突き抜けているのは、本学の学生が地域だけでなく、さらに日本、世界へと枠を越えて活躍して欲しいという意味を込めています。また、「20」に動きを加え、色は明るい水色を使用することで、学生たちのアクティブさを表現しています。大学創立20周年をお祝いし、この先の本学の明るい未来を創造して欲しいという願いをデザインしました。

## CONTENTS

- 02-07 ■ 特別鼎談
- 08-09 ■ 特別対談
- 10-15 ■ 祝辞
- 16-21 ■ ふりかえれば未来
- 22-23 ■ クローズアップ① 文明観光
- 24-25 ■ クローズアップ② 匠
- 26-27 ■ クローズアップ③ フェアトレード
- 28-29 ■ クローズアップ④ 地域協働プロジェクト
- 30-31 ■ クローズアップ⑤ 地域とのかかわり
- 32-33 ■ クローズアップ⑥ 国際交流
- 34-45 ■ 卒業生だより
- 46-47 ■ 20年の軌跡



### 遠州・浜松との関わり、気質

**川勝** 静岡文化芸術大学の創立20周年、おめでとうございます。

振り返りますと、本学の理念を構想し、大学創設に尽力されたのは、当時、京都大学教授の高坂正堯先生でした。残念なことに、高坂先生は開学を前にして他界されました。幻の初代学長として多くの人に記憶されています。初代学長は、当時東京大学の名物教授だった木村尚三郎先生でしたから、本学は京都大学と東京大学の二人の高い知性の和がつくり上げた大学です。

現在は元東京大学総長の有馬先生が理事長、元京都大学副学長の横山先生が学長です。大学の誕生から現在にいたるまで、

最高の学者に大学を委ねていることを誇りに思っています。

有馬先生は少年時代を遠州・浜松で過ごされ、横山先生は浜松が生んだ国学者・賀茂真淵の研究で学者として独り立ちされました。有馬先生は人生の大事な時期に、横山先生は学問形成の大事な時期に、ともに遠州・浜松と深い縁をお持ちです。

私は静岡県を預かるものとして、両先生のこれからの大学発展のための構想の実現に尽力すること、言いかえれば、しっかり予算を組んで、県民のご理解を得ながら、先生方の構想の実現に協力したいと思っています。

**有馬** お話のように、私は小学校6年生のときに浜松にまいりました。それまでは神奈

川県の相模原で毎日のんびり過ごしていましたが、浜松の西小学校に入学したら勉強が激しく、他校との競争が激しく大変な毎日でした。当時の最初の思い出は、苦手な逆上がりで、練習の甲斐あってできるようになったことと、良い先生に恵まれたことです。その後入学した浜松一中（現・浜松北高等学校）でも、また幸運なことに良い先生に巡り合えました。

中学校2年生になると勤労動員が始まり、私は中島飛行機（株式会社 SUBARU の前身）という会社で旋盤工として働きました。今思えば、この中学2年、3年の時代に旋盤工のような技術を身につけたことは、人生において非常に重要なことだとつくづく感じています。そして中学校3年の終わり頃に

知の拠点であり続けることを基礎に地域へ、そして世界へ

# 20TH ANNIVERSARY CONVERSATION

静岡文化芸術大学創立20周年記念誌 特別鼎談 (2020年4月7日実施)

静岡県知事

**川勝 平太**

KAWAKATSU HEITA

- 昭和47年 3月 学士（早稲田大学第一政治経済学部経済学科）
- 昭和50年 3月 修士（早稲田大学大学院経済学研究科）
- 昭和60年10月 D.Phil.（オックスフォード大学）
- 平成 2年 4月 早稲田大学政治経済学部教授
- 平成10年 4月 国際日本文化研究センター教授
- 平成19年 4月 学校法人静岡文化芸術大学学長
- 平成21年 7月 静岡県知事（1期目）
- 平成25年 7月 静岡県知事（2期目）
- 平成29年 7月 静岡県知事（3期目）

静岡文化芸術大学 理事長

**有馬 朗人**

ARIMA AKITO

- 昭和28年 3月 東京大学理学部物理学科卒業
- 平成 元年 4月 東京大学総長
- 平成 5年10月 理化学研究所理事長
- 平成10年 7月 参議院議員
- 平成10年 7月 文部大臣
- 平成22年 4月 公立大学法人静岡文化芸術大学理事長に就任
- 平成26年 4月 公立大学法人静岡文化芸術大学理事長に再任
- 平成30年 4月 公立大学法人静岡文化芸術大学理事長に再任

静岡文化芸術大学 学長

**横山 俊夫**

YOKOYAMA TOSHIO

- 昭和45年3月 京都大学法学部卒業
- 昭和47年3月 京都大学大学院法学研究科修士課程修了
- 昭和58年3月 オックスフォード大学哲学博士
- 平成10年4月 京都大学人文科学研究所教授
- 平成14年4月 京都大学大学院地球環境学学術教授
- 平成17年4月 京都大学副学長
- 平成24年4月 滋賀大学理事・副学長、附属図書館長
- 平成28年4月 静岡文化芸術大学学長に就任
- 令和 2年4月 静岡文化芸術大学学長に再任

父が亡くなりまして、それからの生活が大変でした。家庭教師をしながら中学校4年の終了時に飛び入学をして高等学校に行くまで、いわば「慌ただしい時代」を浜松で暮らしたことになります。

しかし一方で、模型のモーターや電池式のラジオを作ったり、当時の浜松高等工業学校（現・静岡大学工学部）で高柳健次郎先生のテレビジョンを見せていただいたりしたことから、「将来は物理をやろう」と明確に決めたのも浜松です。ですから、浜松の思い出はとて多いし、良い友人もたくさんいて、特別な親しみを感じていました。

浜松の面白さというのは、やはり「やらま

いか」ですね。私が最も「やらまいか精神」を体感したのは、戦後すぐの頃です。GHQによって軍国主義的指導をした先生を辞めさせる、という事態になった折、浜松一中でも3人の先生がその対象になりました。すると何人かの「やらまいか精神」旺盛な友人たちが「そんなことはない」と言って、3年の生徒を50人ほど集め、「3人の先生は軍国主義ではありません」とみんなで書いて血判を押して、代表数人がGHQの下請けをしている人へ提出する、という行動に出ました。その結果、先生方は退職せずに済んだのです。

**横山** いいお話ですね。この辺りはどうも「言霊の幸はふ国（霊力ある言葉がさかえる国）」を意識させられるところがあります。有馬先生の初期の俳句には、浜松近郊の春の夕暮れや、雨雲の下の田植えの風景が詠まれ、叙景に優れておられるのは、真淵の万葉調に通じるところがあると思います。真淵が詠えた万葉歌の精神とは、自分の気持ちを押し付けずに、すっと目に入ったままの景色を詠むところでした。木村尚三郎先生もことは運びにたけた方で、本学10周年「ふりかえれば未来」は、亡き木村先生のご本のタイトルを使わせてもらったようです。

どの先生方も飄々とされています。私は



この遠州という場所が、そういう人柄をつくるのではないかと思っています。

### 学問と生活が一体となった オックスフォード

**有馬** お二人は学生としてイギリスのオックスフォード大学にいらしたそうですが、私は研究者としてふた夏を3カ月ずつ暮らしたことがあります。国際化に関しては、留学生を活用するような点でアメリカがいいと思いますが、教育全般に関しては、やはりイギリスの大学教育がいいですね。特にチューター制度が優れていると思います。1人の先生が3人ぐらいの学生の一人一人と議論し合い、時々食事を共にする機会を設けながら指導をし、

### 遠州学林の確立を目指して

**横山** 2年ほど前から、有馬先生と「遠州学林」をつくりましようとお話しておりますが、やはりそうした人が集まる場所に滞在したり、暮らしたりして、初めて学びの文化が伝わるといいます。浜松の郊外には浜松医大や静大工学部などの教育機関もあり、大勢の研究者がおられます。また、企業としてヤマハグループやスズキ株式会社には海外から数々のデザイナーや技術者たちが来られます。彼らはたいていホテル泊で、仕事が終わればすぐに帰国される。しかし、浜松に時を同じくして滞在する多彩な人々が対話できれば、さらに有意義な時を共有できますし、学生にとっても教育の場になる。そして、

たとえば天竜の奥に千年も続く芸能の価値を共に考えてみる。「遠州学林」の考えは、この土地ならではの産物です。

**川勝** 両先生がおっしゃる「遠州学林」は、人々が分野を超えて交流しながら生まれる知恵が、生活や産業に活かされ、天・地・人の調和する新しい文明を提案する大学のモデルになる予感があります。

そもそも本学は「文科系の大学を」という地元の要望を受けて、高坂先生が基本構想を練られました。日本は、戦前は軍事力を、戦後は経済力を重視しましたが、二十一世紀は文化力が大切になるというのが高坂構想でした。文化力を高める人材の育成が理念にあります。

美意識と有用性の融合、芸術的感性と工学的知識を合わせたのがデザインです。小さなものから大きなものまで動かす力がデザインです。それは新しい実学といえます。その構想のもとに、本学にはデザイン学部が設置されました。

教員・学生・町の人たちが時空間を共有する、オックスフォードのカレッジのような「遠州学林」を“やらまいか精神”でつくっていただきたい。

**横山** “やらまいか精神”といえば、本学の隣の「野口町」の皆さんも熱いですね。ここは万葉集に詠われる「曳馬野」への入り口ということで野口といわれますが、古い家筋が多く残り、浜松まつりにも熱い方々です。



また学生たちがみんな寮に入ってお互いに切磋琢磨するという、そんな教育方法を日本でも実現できないものかと思っています。

**川勝** 共感してお聞きしました。横山先生も私もオックスフォードで学びましたが、オックスフォードは学問と生活が一体の大学町です。日本でも、かつて東大寺にしろ、高野山の金剛峯寺にしろ、比叡山の延暦寺にしろ、最高学府の役割を担っていました。オックスフォードのカレッジのように、寺で生活しながら修行したのです。明治期に物理・工学・法学・医学など、いわゆる洋学を輸入した際、舶来の知識をなるべく早く頭に詰めこむことを優

先しましたから、学問と生活がばらばらになりました。

**横山** おっしゃる通りです。知識を輸入して、いかに効率良く吸収するかが当時の日本の大学の主な役割でした。ですから、機能的な組織にはなりましたが、反面、共同で生活する場という性格はあまりないですね。イギリスの古い大学の学寮にはいろいろな分野の、老大家から若い人たちまでが暮らしていて、互いの息づかいが伝わるたたずまいです。

**有馬** みんなで一緒に朝食をとるでしょ。

あれがとても良いと思いますね。

**横山** そうですね。セミナーの翌朝、メンバーの多くと一緒に朝食を囲みます。そうすると「昨日はあのような発表をしたけれど、実はこういう点が言い足りなかった」というような話が出ます。大事なことは、肩の力を抜いた朝食のときに出てくる。面白いですよ。

**有馬** そんなオックスフォードのような大学が日本にできないだろうか、というのが私の長年の希望です。

本学の20周年式典には「ぜひ激練りで祝いたい」と仰るほどです。そうした地域の方々からの応援もかなりあることから、いよいよ新しい大学のかたちを試みるという機が熟してきていると感じます。

**川勝** 本学の原点には町の人たちの熱意があります。いわば遠州の町衆がつくった大学です。浜松を中心に、遠州人が力をあわせ、新しい実学の府にしていきたい。そのためにも「遠州学林」の実現が待たれますね。

**有馬** 私はやはり浜松は賀茂真淵だと思います。浜松にとって家康は偉大ですが、もう



一人、賀茂真淵の存在をもっと認識するべきだと思いますね。

**川勝** 江戸時代にさかんだった儒学は中国の古典です。賀茂真淵は、外国の古典ではなく、日本の古典を追求して、わが国の古典として万葉集を研究し、真淵の弟子・本居宣長は古事記を研究しました。まさに“やらまいか精神”の発露が生んだのが国学です。賀茂真淵は日本の古来の心を取り戻す回転軸となった存在です。

**有馬** 国学を確立したわけですね。

**川勝** そのとおりです。遠州は江戸の文化と京都の文化が東海道で融合するところ



は普遍的なもので人類の財産です。本学を起点に広く情報を発信してください。

**横山** 技術の進歩とともに、パワフルなものや便利なものは今後も世に出ると思います。しかし、それを生活にどう活かして、社会全体としてどのようなかたちに落ち着くのかという議論を、直近の利害を離れて深められるのは大学です。そのときは大学関係者だけでなく、町をあげていろいろな対話を重ねていくことになります。この創立20周年を機に、三遠南信という、世界にもまれな風土とのかかわりをこれまで以上に強化し、ここを拠点に新たな学問を築いていくという大きな節目になるのではないかと考えています。

### 教員、学生に向けての 今後の期待と要望

**川勝** 本学は、日本の東西の最高学府である東京大学と京都大学の叡智が融合して創設されました。先生・学生は誇りを持っていただきたい。新しい時代を拓くのは文化力です。それは小さなプロダクト・デザインから大きな国土のデザインまで動かす力です。国づくりのデザイン、地域づくりのデザイン、物づくりのデザイン、場合によっては地球や社会のデザインも含め、その発信拠点が本学です。本学の新しい使命を先生・学生に自覚していただきたい。グローバルに目くばりしながら、地域に立脚した実力を身につけていただきたいと思っています。



です。遠州は独特の風通しの良さがあります。遠州には、他の地域と比べると、平等感が強い。それが遠州の風土性ですね。そうした風通しの良さが権威や既成の秩序に対しても遠慮しない“やらまいか精神”を生んだのではないかと思います。

### 世界の文化が 融合する拠点として

**有馬** 話は飛びますが、本学にはせっかくブラジル系日本人学生が在籍しているわけですから、南アメリカとの関係をもっと強化して、日系ブラジル人の方に日本に戻っていただい

て、本学で学び、日本で活躍してもらえたらと思っています。

それと中国との関係ですが、本学には英語・中国語教育センターがあるので、中国の方をもっと呼んで、ここ遠州を中心に中国との関係をより進展させるなど、国際的なセンターにできないだろうかとも思っています。静岡は気候が温暖で食べ物も豊富です。東京だけではなく、ぜひ静岡に日本人も外国人も大勢来てほしいですね。

それから最近ではイスラム系のインドネシア人やマレーシア人の方も多いため、イスラム系の人たちとどう付き合うべきか。食事のことやお祈りのことなど、これは日本が今後直面す

るであろう問題ですので、この件について、ぜひ知事にお聞きしたいと思います。

**川勝** イスラム系の方に関しては、日常の食事とお祈りの部屋を整備しています。食事は豚とアルコールは使わないなどハラールに配慮したメニューを用意して、お祈りの部屋には礼拝用の絨毯を敷き、メッカの方向を表示したりしています。

浜松市は、江戸と京都との中央に位置し、東西の文化が融合する場所柄です。これからは人種や宗教、肌の色などで差別されることのない「世界の人たちの文化が融合する場所」として発展してほしいですね。学問

**有馬** まずは大学院に博士課程を確立したいと思っています。また中国や韓国など、アジアの人たちに大勢来ていただいて、日本の文化と自国の文化を比較しながら共に学ぶというように、ここがアジアの中心になるような大学になれたらいいと思っています。そして、デザインを中心にアジアやヨーロッパの文化を取り入れて、世のためとなる、世界的に必要とされるものをつくり上げてほしいと思います。デザイン分野だけでなく、国際関係分野、さらには大学院まで含めた学問の中心になっていくことを望みます。

**横山** 今の教員、学生、あるいは応援して

くださる地域の方々が、自分の言葉、常の言葉で語り合えるようなキャンパスをつくっていくことが、新しい学問をつくる基本になると思います。専門用語は噛み砕き、皆さんで語りあえる言葉で学問をつくり直すという、熱い場所をここに開いていきたいのです。いわば、現代に求められる言霊がここに幸はふことを夢に、歩みを進めたいと思います。





**横山** 本学はおかげさまで20周年を迎えました。20年をさらにさかのぼって、会長が「浜松に新しい大学を」とお考えだった頃、とくにどのような思いを抱いておられたのでしょうか。

**鈴木** 県立短大の建て替え論議が起こった1992年頃から、静岡県立の4年制大学が静岡市にあって、浜松市には短期大学しかないのは不平等ではないか、との思いがありました。当時の静岡市の人口は47万人、浜松市は55万人。ところが、18歳から23歳までの女性は、浜松のほうが約2万人少なかったのです。一部上場企業が多い浜松では、どの企業も全国から男子学生を募集していたので、男性ばかりでした。

**横山** かたよっていたんですね。

**鈴木** そうです。浜松に若い女性を増やすためにも、文科系の4年生大学をぜひつくってほしいと思いました。

**横山** そのお考えは、我々の大学をつくっていただいたことで、少しは現実のものとなったのではないかと思います。近年の女子学生の活躍も素晴らしいですからね。

**鈴木** 地元の大学ということで、当社にも多くの卒業生に入社していただいています。

**横山** スズキ株式会社には、これまで80名を超える卒業生を採用していただきました。本当にありがたいことです。また、スズキ教育文化財団の「スズキ奨学基金」奨学生選考におきましても、格別にご高配をいただいております。

たいと希望され、本学学生も先端科学技術に関心を強めており、静岡大学や浜松医科大学や光産業創成大学院大学と本学の関係が教育面でやや近くなる気配です。

**鈴木** 静岡大学の工学部・情報学部と浜松医科大学が統合することになって、そこに文科系の静岡文化芸術大学が一緒になったら、総合大学になりますが、いかがでしょう。

**横山** それぞれの学風を活かしつつ交流を深めるのに遠州学林は役立ちそうです。この遠州という、自然も歴史も豊かな地には、賀茂真淵翁や金原明善翁、高柳健次郎先生などのように、新たな分野を切り拓く伝統があります。今の時代の技術にとって大切なのは、ただ「早い」とか「便利」だけでなく、「その先の社会や暮らしや環

境をどう創っていくか」なんです。それがデザインになるわけですから、技術者や科学者、あるいは医学者が一緒になって対話を重ねることが必要です。スズキも日々技術の可能性を極限まで追求しておられると思います。そういうお話を本学学生に聞かせたいと考えております。

**鈴木** 私どもの技術者やデザイナーが静岡文化芸術大学の講師を務めさせていただくということですね。

**横山** ありがたいことに、昨年12月に本学と静岡県文化プログラムの共催で「先端技術展 ～技人(わざびと)たちの物語～」を開きまして、スズキからは、オートバイ「KATANA」のデザインチームにぜひぶんど協力いただき、企画に関わった学生たちに素晴らしい教育

の機会を与えられました。これを機に、会長がおっしゃったように、地域の他の大学とのおつきあいを、さらに力を入れたいと思っています。

**鈴木** 浜松や遠州地方は「やらまいか」の精神が旺盛ですからね。私のところも今年創立100周年を迎えまして、織機の時代、オートバイの時代、四輪車の時代、そして海外にも工場をつくる時代を拓いてきました。100年目以降はガソリン車の時代から電気自動車の時代、さらには水素燃料など新たなエネルギーの時代へ変わる見通しで取り組んでいます。

**横山** 会長からご覧になって、静岡文化芸術大学は、今後どうあればとお考えでしょうか。

**鈴木** 地元に対して協力していただきたいと思っています。現在は浜松にいても、ロンドンや



スズキ株式会社 代表取締役会長

鈴木 修

SUZUKI OSAMU

対談

静岡文化芸術大学 学長

横山 俊夫

YOKOYAMA TOSHIO

## 静岡文化芸術大学創立20周年記念誌 特別対談 (2020年12月8日実施)

やらまいかの精神を発揮して  
いつまでも地域や市民に  
開かれた大学を



スズキ株式会社 代表取締役会長

鈴木 修

SUZUKI OSAMU

### PROFILE

昭和33年 4月	鈴木自動車工業(現:スズキ)入社
昭和53年 6月	同代表取締役社長
平成 2年10月	同社は「スズキ」に社名変更、同代表取締役社長
平成12年 6月	同代表取締役会長兼最高経営責任者
平成20年12月	スズキ代表取締役会長兼社長
平成27年 6月	同代表取締役会長兼最高経営責任者
平成28年 6月	同代表取締役会長

**鈴木** 私自身が小学校から大学まで、優秀とは言えなかったものですが、せめて成績優秀な方には頑張してほしいと思ってきました。

**横山** おかげさまで、皆、修学に励んでおります。それぞれのこれからが楽しみです。私はこの20周年を機に、もう一度開学の頃に立ち返って、浜松のまちと大学のあり方を考えたいと思っています。このまちあつての大学ですから。

**鈴木** 私が願うこともそこですよ。市民の皆さんとグッドコミュニケーションを図ってください。

**横山** うれしいお言葉です。開学初期の卒業生は、さまざまな分野で責任を持つ立場になっています。今、本学では卒業生たちや地元産業界のゲストの方々、国内外からの

学生たちと一緒に滞在して対話を深められるような学寮をつくろうと計画しています。「遠州学林」構想といいまして、有馬朗人先生も、亡くなられるまで、その意義を熱く語っておられました。例えば、スズキが招かれた技術者に、しばらく遠州学林に滞在していただいて、教員や学生たちと食事を共にしながら語り合い、交流を深め、互いに高めあうのです。このような構想は、これまで日本の大学にはなかったものですが、ここ浜松であればこそできるのではないかと思います。

**鈴木** 地域や市民とも密接な関係を持ちながら、遠州学林を発展させていってください。

**横山** はい、ありがとうございます。最近では理科系の若い人たちがデザインのことも学び

ニューヨークにいても、すぐに意見交換できますから、浜松から世界に向けて情報発信をお願いします。それと同時に、文化とやらまいかの精神を両立させて文化芸術活動を旺盛にするとか、やらまいかに対立軸を作ってやめまいかを提案するとか、成功したらどこまで攻めていって、失敗したら撤退を考えていく、引き際も大切です。

**横山** なるほど、攻めるチャンスの見極めだけではなく、引き際も大事、と。

**鈴木** 頭を下げて撤退しますと、そのあと「よーし見ておれ、反撃するぞ、見返してやるぞ」と燃えてきます。再チャレンジする意欲が生まれます。やらまいかと同じで「やる気」を持つことが大事です。

**横山** 何か家康公のお話を聞いているような気がしてきました。(笑)

**鈴木** 成功ばかりじゃありません。でも、通算して成功51対失敗49なら成功のうちに入ります。失敗は成功のもとだということで、私も42年間経営トップを務めまして、振り返ってみますと、25年周期で会社存亡の危機に直面してきましたよ。へこたれて、へこたれるなかれ、やらまいか。元気を出してやりましょう。大学が今後も発展することを祈ります。

**横山** ありがとうございます。会長ならではのお言葉と受けとめ、つねに思い浮かべていきたいと存じます。



## 祝 辞

浜松市長  
鈴木 康友

静岡文化芸術大学が創立20周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

平成12年4月の開学以来、静岡県西部地域における学術や文化と産業の振興の一翼を担う拠点施設として、また地域・国際・世代に開かれた大学として、学生の教育にとどまらず、本市の発展や都市づくりに多大なご貢献をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

開学から20年の歴史の中で、平成16年4月には大学院を開設、平成31年4月には、文化政策学部に「文明観光学コース」を、デザイン学部に「匠領域」を新設し、地域の文化、芸術、学問等の発展のため、人材の育成や大学の運営に尽力してこられた理事長・学長・教職員の皆さまに改めて敬意を表します。

貴大学は、静岡県、浜松市、地元産業界が協力して設立した大学として、各方面から大きな期待が寄せられる中、20周年を迎え多くの卒業生が社会の中堅として活躍されております。時代の要請に応える人材の育成や、様々な分野における積極的な地域貢献により、浜松市及び市民にとって掛け替えない大学でございます。

平成26年3月、浜松市と貴大学は「相互協力及び連携に関する協定」を締結し、教育や人材育成、芸術・文化の振興等で連携を深めてきました。平成30年2月には、貴大学がアジア初の「フェアトレード大学」に認定され、「フェアトレードタウン」、「SDGs未来都市」である浜松市にとり貴大学は、地方創生を推進するための大変重要なパートナーです。

広大な市域を有する浜松市は、豊富な自然環境や地域ごとの優れた特色がある一

方、人口減少が進んでいく新時代を迎え、いかに活力ある地域を築いていくかという課題を抱えています。また、市民のニーズが多様化・複雑化する中で、これらの課題を解決していくためには、両者の連携を更に強化していく必要があります。

貴大学には今後も開かれた大学として、地域の課題に目を向け、教員の皆さまの豊富な専門的知識と、学生の皆さまのもつ積極的な探求心で、十分に創造力を発揮していただき、本市の持続可能なまちづくりに今まで以上にご協力をいただくようお願いを申し上げます。

結びに、記念すべき創立20周年を一つの節目として、貴大学の今後のますますのご発展と、関係者の皆さまのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

# 地元・浜松の大学として、 今後に寄せる期待

## 祝 辞

浜松商工会議所 会頭  
大須賀 正孝

本年、静岡文化芸術大学が創立20周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

貴大学では、平成12年の開学以来、「地域」「国際」「世代」など、あらゆる対象に「開かれた大学」を標榜され、様々な形で地域社会の発展に貢献を続けてこられました。

開学からの20年間、大学の運営や人材育成にご尽力いただきました役職員の皆様をはじめ、日々勉学に励む学生の皆様、卒業後に地域社会の中で活躍いただいている卒業生の皆様、さらには大切なご子息を大学に送り出していただきましたご父兄の皆様、すべての方々に、地域経済界を代表して御礼申し上げます。

近年、AIやIoTの発展、自動車のEV化など、第4次産業革命とも言われる経済環境の激変が進んでいたところに、新型コロナウイルスの流行も重なり、「ものづくりのまち」浜松の地域経済にも深刻な影響が生じております。

こうした厳しい経済状況の中、当地域が今後も地域間競争に打ち勝ち、持続的に発展を続けていくためには、地域への理解が深く、高度な能力を持つ若い人材を育成し、その能力を地域のために発揮していただくことが必要です。

その意味でも、文化・政策の両面から地域活性化を考察できる人材を養成する「文化政策学部」と、高度なデザイン力で、ものづくりに新たな付加価値を創造できる人材を養成する「デザイン学部」の二枚看板学部を擁する貴大学は、今後当地域の発展に大きな

力を発揮していただけるものと、大いに期待しております。

同時に、コロナウイルスの流行により蔓延する閉塞感を打破し、当地域において新たな日常の構築を先導することができるのも、貴大学にて卓越した発想力、アイデア、行動力、ネットワークを育んだ、若き学生の皆様や卒業生の皆様であると確信しております。

結びにあたり、貴大学の今後30周年、さらには100周年に至るまでの益々のご発展と、関係者の皆様の今後益々のご活躍を心より祈念し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

# 「開かれた大学」から 地域社会に一層の活力を



浜松市長  
鈴木 康友  
SUZUKI YASUTOMO

### PROFILE

昭和60年 3月	財団法人松下政経塾卒業
平成 2年 4月	ステラプランニング代表取締役
平成12年 6月	衆議院議員 経済産業委員会理事
平成15年11月	衆議院議員(2期目) 経済産業委員会理事
平成19年 5月	浜松市長就任
平成23年 5月	浜松市長再選(2期目)
平成23年12月	指定都市市長会副会長就任
平成27年 5月	浜松市長再選(3期目)
令和 元年 5月	浜松市長再選(4期目)



浜松商工会議所 会頭  
大須賀 正孝  
OSUGA MASATAKA

### PROFILE

昭和46年 2月	浜松協同運送機[現機ハマキョウレックス]を創業、代表取締役社長
平成19年 6月	同社代表取締役会長(～現在に至る)
平成25年11月	浜松商工会議所会頭 浜松防衛団体連合会会長 三遠南信地域経済開発協議会代表幹事 浜松まちなかにぎわい協議会副会長
平成29年12月	国道1号線浜松/バイパス道路整備促進期成同盟会副会長
平成30年 6月	(公財)浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 理事長
平成31年 4月	静岡県産業成長戦略協議委員 第31期日本商工会議所常議員



記念植樹(2000年4月13日)

# 01

## 祝 辞



### 地域を支える 知的資産の源泉として

元副学長

上野 征洋 (うえの ゆきひろ)

Ueno Yukihiko

20周年を迎え、ますます充実・発展を続けるSUACの姿に感慨ひとしおです。

私の手元に古い新聞の切り抜き、2000年4月14日の静岡新聞があります。「学問ゆかりの紅梅」の見出しで、新入生代表の中村麻紀さん(芸術文化学科)と萩原一就さん(技術造形学科)の二人がスコップを手に記念植樹を行い、遠景には石川嘉延理事長、木村尚三郎初代学長の姿も。この入学式の日の光景は今も鮮明に脳裏にあります。

それから20年。なんとと言ってもSUACの最大の資産は卒業生です。既に5000名以上が巣立ち、初期卒業生の多くが社会の中核で活躍しています。

中国やインドで最前線を担うメーカー社員／融資のプロとして地域経済を支える金融マン／したたかな記事を書く政治部記者／美術館の企画展を統括するキュレーター／東京でレンタル・オフィスを起業し活躍を続けるデザイン学部OG/この春から総務省の出先機関でバリ駐在になった公務員／鹿児島県の農家に嫁ぎ、3人の子育てとブドウ園で奮闘するお母さん／授業の充実之余念がない高校教師/コロナ禍にマスクを送ってくれたアパレル経営者、などSNSや手紙で消息が届いたり、拙宅を訪ねてくる卒業生は枚挙にいとまがない。卒業後、早稲田大の大学院に進み、浙江省に戻ってファンドマネジャーとして成功した留学生とは、数カ月前10年ぶりの浜松再訪で話が弾みました。彼女は経済界からの招待講演で中国経済とSUAC時代の思い出を語って颯爽と帰国していききました。

人のつながり、知の蓄積、才能のインキュベーター、などSUACが果たしてきたのは、地域社会を彫琢する人的資源・知的資産の源泉という役割です。

開学当時、木村学長は、「グローバルに活躍する実務家を育てよう」と語り、学生には「出会う、感じる、創造する」というフレーズに込めた期待を語っておられた。昨年末、卒業生との会合で、一人が「出会う、感じる、創造する、は社会人になっても役に立ちますね」と感慨深くつぶやいた。既に彼は組織の中堅幹部である。開学当初にめざしたビジョンを仕事にも生かしている姿勢がうれしかった。

時を刻んで成長してゆく在校生、卒業生たち。その歩みの先にある大いなる未来をこれからも見守って行きたいと思います。



竣工した校舎(2000年3月)

# 02

## 祝 辞



### ポスト・コロナの時代とSUAC

元副学長

山本 幸司 (やまもと こうじ)

Yamamoto Koji

開学二十周年おめでとうございます。

折からの新型コロナ・ウイルスの蔓延で、学長・理事長はじめ関係教職員の皆様は大変な御苦労の渦中にあることと拝察致します。どうか無事に乗り越えてSUACの新たな歴史を刻んでいって頂きたいと、心から念じております。

黒死病のように大規模な疫病の流行は、社会全体に広範な影響を残します。コロナ禍によって、社会はどう変わっていくのでしょうか。今回の惨禍を招いた最大の要因は、人口の都市集中とグローバル化に伴う人の移動であり、さらに野生生物への無警戒な接近や、遠因としての地球温暖化や大気汚染なども挙げられます。

コロナへの対応の中で明らかになったのは、中央に機能が集中する現在の社会体制から脱却して、各地域が自立して機能する、しなやかでレジリエントな日本社会の実現が急務だということです。動物の体のように各部が機能分化している社会組織は、一部が損傷ただけで全体が機能しなくなるおそれがあります。他方、植物は無数にある根端が集散的な脳の役割を果たし、一部が損傷しても生き延びやすい組織を持っています。この対比は、中央集権的な社会組織と、人口が分散し、各種の権限や資源もそれに応じて配分された社会組織との対照にも当てはまります。

コロナの問題はまた資本の論理だけで動くグローバル化は、人々の生活環境や生活の実質に対する配慮を欠いていたことも曝け出しました。世界各地に自治・自立的なローカル・コミュニティが成立し、それが相互に繋がるような別な形のグローバル化が実現すれば、世界は大きく変わる可能性があると思います。

翻って見れば、地元各界の要望をもとに県・市の援助で発足したSUACは、その出発点から地域社会の課題に取り組む使命を負っていました。私としては今後のSUACの進路が、この使命に背かず、自立的なポスト・コロナの地域社会の発展に貢献するようなものであってほしいと願ってやみません。



# 03

## 祝 辞



本学遠景



### やらまいかとホスピタリティ

元副学長

宮内 博実 (みやうち ひろみ)

Miyauchi Hiromi

20周年ですか、10周年記念企画を準備した頃を懐かしく思い出しています。

これで20歳、ようやく一人前の大人になったことを心からお祝いいたします。新幹線からは、研究棟が見えていたのが、今では高い建物が増え一瞬しか見えなくなり、個人的にはちょっと残念です。皐月の澄み切った青空のもと、萌えるような「黄緑」の茶葉畑が一面に広がる、その生命感溢れる鮮やかな自然色は一生忘れない感動です。

文化芸術の意味を考えてみますと、空気や水と同じくらい人が生きていくには欠かせない栄養素や潤滑油と思います。五感を通じて得られた感動をなんとか記録に残したい、出来れば、他の人にも自分が感じたことやひらめきを言葉や絵に表現したいと思うことでしょう。アートとデザインの違いは、特定の依頼主がないのがアート、目的が示されるのがデザインです。そして作品を通じ個人として楽しむのがアート、より多くの人に同じものを提供して、使いやすさ、楽しさ、気持ちの良さなどを具体化するのがデザイン、さらに感性を刺激したり、暮らしを豊かにしてくれるのがセンスです。

東京と大阪の中間に位置する浜松は、昔から東と西の文化が盛んに行き交う魅力的な町です。常に人の流れを見ながら、何が流行りで、何が当たり前なのか、いながらにして情報を得ていたと思います。そんな土地柄で「やらまいか精神」と「ホスピタリティ」は、地域力を引き出すキャッチフレーズとして大切にしたい。これまでの文化的な背景を抜きにして、これから先のデザインは考えられません。いつの時代も優れたデザインは、多くの人に支持されて、その国、その地域の文化や遺産として大切に保存されています。これからのデザイン発想として、個人的な感覚や美的センスだけに頼るのではなく、歴史や地域特性、文化的な背景を踏まえた「マーケティング」的な視点を期待したい。これからの静岡文化芸術大学のますますの活躍と発展を祈ります。

# 04

## 祝 辞



金属工房



### 受け継がれるDNA

元副学長

河原林 桂一郎 (かわらばやし けいいちろう)

Kawarabayashi Keiichiro

創立20周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。2004年にはじめての卒業生が出たその年に赴任した時のことを今でも鮮明に覚えています。最初の印象は、キャンパス全体に漂うフロンティアスピリットと自分たちの大学を創ってこうという強い意欲や求心力でした。同時に地域の自主・独立の風土や大学に対する期待にも大きいものを感じました。ゼロから立ち上げていく大学に対し、陰に日なたに温かく大学の成長を支援していただきました。

創立当時、「デザイン学部」という学部のある大学は珍しく、芸術系と工学系に2分されていた大学のデザイン教育の中で文科系のデザイン学部としてデザイン界で大いに注目されていました。特に文化政策学部とデザイン学部が連携した全学共通科目が設定されたのは、他に例を見ない文科系のデザイン教育の特徴でした。

本来、芸術も技術も語源であるラテン語のArsでは同じで、人工物や技術を意味し、その有用性、目的達成性、複数生産性などで純粋芸術、応用芸術、工芸、デザインと分かれていきました。そのデザインの意味が、今日では技術との関係だけでなく生活や文化と共に語られています。大学には開学準備委員会の委員で初代デザイン学部長を務められた栄久庵憲司先生の想いである「人工物すべてを「道具＝道に具わるもの」という概念でとらえ、手を動かして考えることにより、感性を磨き、五感を研ぎ澄ます」ための充実した設備や環境が整っています。人に感動を与える生活や文化を創造するデザイナーを育成しようという開学以来のDNAは、デジタル時代の今でも連綿と受け継がれていると信じています。

デザインには、総合的な思考による知性と優れた感性による「美しい」価値の創造や、人と社会、モノやコトのあり方への柔軟な発想、将来を見据える「新しい」価値を創造する力があります。静岡文化芸術大学が活力溢れる大学として地域社会から国際社会まで広く活躍する人材を輩出する「創造と想像の頂点」となれることを期待しております。

# 01

## ふりかえれば未来

Looking Back The Future

### 「青年から壮年へ」

私が在任中に10周年を迎え、記念式典が開催され、やや遅れて10年史が、山本幸司教授を中心とする編集委員の方々によって刊行されたのが、ついこの間のような気がする。それからすでに10年経過したのかと思うと、感無量といわざるを得ない。

今年は新型コロナウイルスによって、世界中が大打撃を受け、大学もその渦中であって、教職員、学生共々、非常な対応に苦勞されている。心よりお見舞い申しあげる。9年前に戻ると2011年3月11日に東日本大震災がおこった。あの時の日本全体が受けたショックは、ある意味、新型コロナウイルスより大きかったかもしれない。いずれにしても、10年に一度くらいの間隔で、国中を震撼させる異変がおきることを、これからは覚悟しなくてはならぬようだ。

10年史を読んで感銘を受けたのは、初代デザイン学部長に就任された栄久庵憲司さんのお仕事であった。この地にはじめて誕生するデザイン学部にかかる思いの深さが、今日の大学の礎になっている。その意味でもはじめの10年は少年時代であり、そのあとの10年は青年時代であったともいえよう。2010年に就任した時は、理事長、学長の任期も決まっておらず、制度的に未整備なうえに、私立の枠組みから公立へと移行するについて、県立大との待遇上の格差解消の課題などあり、問題は山積していた。しかし教職員の意気の高さは非常に高かったから、今はなき根本敏行教授が中心になってカリキュラム改正に取り組み、大きな学科のくくり方をして学生の選択の自由度をあげる方向へと動いた。

20代は人間でいえば青年時代であるが、公立の学術・高等教育機関としては壮年期ではないかと思う。私が今まで在籍し、また参加した機関での印象でいうと、創立25年くらいに最も活潑な活動期を迎えているようだ。30年を過ぎると、よくいえば成長より充実へ、悪くいえば活力を失う。これからの10年が本学にとって最も輝かしい壮年時代になることを確信している。



静岡文化芸術大学 前学長

熊倉 功夫 (くまくら いさお)  
Kumakura Isao

# 02

## ふりかえれば未来

Looking Back The Future

### 「文化を冠する大学とは？」

本学に、非常勤の理事として関わって以来、10年が過ぎた。現知事の川勝さんが学長を務めていた時代も、本学のことを耳にしていたから、かなりの期間、本学を外から見ていることになる。理事として、大学の運営を、ほぼ毎月のように会議で見ているが、公立の地方大学がいかなる問題を抱えているのか、私立大学の運営に関わる身として、参考になることも多い。

節目の年の記念誌への寄稿ということで、この機会に、役員会という場では話せない、文化芸術大学の教育とは何か、どうあるべきかという、理念的なテーマについて、日頃考えていることを述べておきたい。どのような大学もその使命とは、智の流れを生み出し、それを社会に普及させ、その進歩発展に寄与することが使命である。

その変化の要因が、自然であれ人為的であれ、困難に直面した文明は、技術革新によってそれを乗り越え、発展させてきた。技術革新を伴わない文明は滅亡した、というのが歴史の語るところである。環境決定論者との違いは、ホモサピエンスがもつこの固有の能力を、どこまで評価するかという点にある。

文化とかデザインという言葉は、一般的には、文系というイメージに埋没しているが、実際には異なる。それは本来、上で述べたような、技術革新の中核に位置づけられる、唯一ともいえる、極めて重要な概念なのだ。未来に向けて、本学をあえて厳しく評価すれば、この点の認識が充分でないことが、マイナス点として挙げられる。

ホモサピエンスは、文化という、自らデザインできるソフトウェアを手にした。このことが、それまでの人類と、決定的に異なる道を歩ませた。DNAという、すべての生物が共有する天与のソフトウェアにプラスする、新たなソフトウェアを手にしたのだ。その結果、ホモサピエンスは、生物圏から分化し、地球システムのなかに、人間圏という新たな構成要素を作って生き始めた。それが文明の定義に他ならない。

本学が、世界という舞台で、日本の単なる一地方公立大学として埋没せず、独自性を発揮し、未来に向けて発展するとすれば、このような視点で、文化やデザインを追求する以外に道はない、と筆者は考えている。



静岡文化芸術大学 理事 (学術・国際交流担当)

松井 孝典 (まつい たかふみ)  
Matsui Takafumi

# 03

## ふりかえれば未来

Looking Back The Future



静岡文化芸術大学名誉教授・理事（教育研究担当）

**高田 和文** (たかだ かずふみ)  
Takada Kazufumi

### 「未来をめざしつつ、過去にさかのぼる」

創立20年を迎えた静岡文化芸術大学は、一般的に言えばまだまだ新しい大学です。

「ふりかえれば未来」は、木村尚三郎初代学長の著書の題でした。20周年記念事業のスローガンは「未来へつなぐ知と実践」です。私たちの大学が「未来」を志していることは、いろいろな形で表現されてきました。けれども、それは単に新しい大学で歴史が短いという理由からだけではありません。根本的には2つの学部、文化政策学部とデザイン学部の性格に由来するものと私は考えています。

「政策」とは、現実の社会の中で1つの選択をし、意思決定をしてゆくことです。従来型の大学が目的とする教育や研究とはやや性格を異にします。また、「デザイン」は思いや考えを社会に受け入れられる形に具現化してゆくことです。アカデミックな研究や純粋な自己表現をめざす芸術＝アートとは違ってきます。このような2つの学部が置かれているところに、社会に関わろうとする強い意志を感じます。

とはいえ、大学である以上、学術研究と教育活動が基礎になることに変わりありません。これらはもっぱら過去の事柄に関わるものです。研究の対象になるのは、過去の出来事です。歴史研究は言うまでもなく、現在の事象を研究する場合であっても、厳密に言えば一瞬前の過去を見ているにすぎません。教育もまた、過去のことから学んだものを伝えるのが基本です。教師は予言者ではないし、そうであってはならないと思います。

未来に向けて提案・選択をし、設計図を示す、そのために過去にさかのぼって物事を見つめる、それがこの大学に課せられた使命だと思います。未来をめざしながら過去にさかのぼるという姿勢こそ、「ふりかえれば未来」の意味するところだと思います。

本学が20年の節目を迎えた今年、世界は新型コロナウイルスの脅威に遭遇しています。この危機にどう立ち向かうべきか。こういう時こそ、過去の歴史から多くを学ぶことができるはずだと思います。

# 04

## ふりかえれば未来

Looking Back The Future



静岡文化芸術大学理事（総務担当）

**伊熊 元則** (いくま もとのり)  
Ikuma Motonori

### 「明日の浜松、遠州の未来を担う」

地元浜松地域の熱い期待と絶大なご支援の下で本学の開学に至り、ここに20周年を迎えることができましたことに対し、本学にかかわりがあるすべての皆様方に深甚なる謝意を申し上げます。

実務型の人材育成と社会貢献を目指す本学設置の趣旨が地域の皆様に御理解をいただき、本学の存在が浸透し地域との結びつきがますます強固になってきたものと、様々な場や機会に感じています。

順風満帆とも思える地歩を占めつつある中、令和に入り1年満たず突然生じた新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による公衆衛生上の困難な事態に遭遇し、教育環境や大学運営の激変に対処する必要に迫られ、厳しい状況に直面しています。

しかし、こうした事態を乗り越えてさらに飛躍できる底力、克服力が本学教職員に十分備わっていますので、これまで進めてきた本学の歩みを止めることなく、むしろ教育研究、地域貢献などの新たな展開につながることを期待しています。

本学の20年にわたる歴史の中で、初代学長予定者の高坂正堯氏や、歴代4代にわたる学長のお教えやご功績を忘れることはできません。

私のことながら、大学生での学び、静岡県職員としての仕事、本学に就いての任務において、これらの先生方に接することができ、卓越した知識経験に啓発されたことは大いに幸せなことと思います。

さらに、有馬朗人先生をはじめ、3代の理事長にもお仕えてきたことも稀有な人生経験であったと感じています。感謝申し上げます。

結びに、本学がここ浜松の地にあって、さらには静岡県西部、遠州の未来を切り開く、先進的な学問の府として新型コロナウイルス感染症(COVID-19)を克服し、より一層輝きを増す存在となることを念じて止みませんし、それが実現できるものと確信します。

なお、本学の名称は、県民の公募による手続を経て知事が決定されましたが、浜松の地で育ち現在居住している私としては、この地域にかかわる固有名詞が入っていればよかったかと思っています。

# 05

## ふりかえれば未来

Looking Back The Future

### 「プラスみわたして未来」

大学院デザイン研究科の建築を専攻とする研究室では、共同研究として地域の公共建築の設計・工事監理を実践演習として行っています。これは、国土交通省が平成21年度から指導する一級建築士試験受験資格要件（令和元年度からは一級建築士資格取得要件）を修士2年で取得する為のものでもあります。本大学院建築専攻はこの厳しい国土交通省の要件を満たす数少ない大学院のひとつであります。すでに田子の浦港展望施設、お茶の都ミュージアム改修工事は完成し、現在は、職業能力開発短期大学校、農林環境専門職大学、社会健康医学大学院大学等の設計及び工事監理を進めています。

農林環境専門職大学の全体計画、本校舎の改修、新校舎の設計のために研究室の院生8名と、計画・設計前の現地調査に行ったときの事です。院生から「うちの大学もこんなだったらいいな、農林環境専門職大学のキャンパスは、空が大きく、笑顔と挨拶が気持ちいい。」という、溜め息めいた感想が述べられました。

駐車場に占領された本学キャンパスの中央部は、ご丁寧にも人口地盤によって蓋をされ、薄暗くジメジメした場所となっています。院生は入学時から本学キャンパスは上記の状態であったため（上記状態は開学以来ずっとそうであったのですが）、本学キャンパス構成に何の疑問も持っていなかったのです。農林環境専門職大学のキャンパスを知って、本学のキャンパス構成の不自然さにやっと気が付く事ができました。

ここで、本学の未来の為の提案です。

思い切って中央駐車場と2階ブリッジの無機質なコンクリート構造物を取り払い浜松の広い空を本学のキャンパスに取り戻してはどうでしょうか。駐車スペースは、北棟部に2,3層で確保できます。2階ブリッジの代わりは、南入口大開口部の途切れた2階の廊下を繋げば済む事です。



静岡文化芸術大学副学長

寒竹 伸一 (かんたけ しんいち)  
Kantake Shinichi

# 06

## ふりかえれば未来

Looking Back The Future

### 「ふりかえれば出会い、今そして未来も出会い」

平成12(2000)年4月の開学時に、文化政策学部文化政策学科に助教として着任し、その後、数回のカリキュラム改定、文明観光学コースの設置、3ポリシー（学位授与・教育課程編成および実施・入学者受け入れ方針）の作成などに関わりました。その際には、多くの教職員の方々に助けをもらい、また楽しく世間話もさせていただきました。残念ながらお二人ともご逝去されましたが、教職員食堂で元学長の木村尚三先生と手作りジェラートの話をしたことや、地ビールレストランで元副学長の根本敏行先生とソーセージをつまみながら様々な観光地での体験を語ったことなどを思い出します。また、学部や学科に関わらず、大勢の学生と講義、演習や論文指導、進路相談、大学院の受験指導などで出会いました。今でも多くの卒業生と連絡が続いていて、とても嬉しくありがたく思います。

今後数年の間、本学にとっては、現在の第2期中期計画の目標を着実に達成することはもちろんのこと、令和4年度から始まる第3期中期計画の策定と実施が重要課題となります。この計画には、両学部と両研究科のカリキュラムの検証を中心とした全学的な教育体制の検討と現実的な必要性に応じた再編、本学独自のグローバル化計画の段階的な実施、研究環境の改善、入試制度の検証と改革、大学組織改善・改革のための調査研究活動（IR）の導入、教育研究・大学運営・国際交流などにおける情報通信技術（ICT）の環境整備と利活用の促進など、たくさんの課題が含まれます。もちろん、新型コロナ感染症の拡大と長期化への対応も重要です。このような課題に取り組むためには、多くの多様な教職員が協力する必要があります。

本学の魅力は、学生と教職員が交流しやすい規模と環境、そして、社会科学の視点から文化を考察する学際的な文化政策と、モノと生活の機能性・美・心地よさを追求するデザインのお互いへの刺激と協働から生まれる創造性だと実感しています。「出会う、感じる、創造する」という本学の基本理念を表わす言葉は、その相互関係の「妙」をも意味しているのではないのでしょうか。今後も、本学において「出会い、感じ、創造する」場、時間、機会がより充実するように、微力ながら努力していきたいと思っています。



静岡文化芸術大学副学長

森 俊太 (もり しゅんた)  
Mori Shunta

# 01

クローズアップ

## 文明観光

Civilizations and Tourism

文化政策学部にて新たなコースとして開設された「文明観光学」。  
文明というスケールの大きな視点から観光を学ぶという  
本学ならではの新しい学問領域について、  
育成したい人材像とともに語り合った。



われます。ただ、歴史的事実をいえば、第二次世界大戦後、戦争で使われた米軍のプロペラ輸送機を旅客機に再生したことが世界の航空会社の始まりなわけです。戦争という負の遺産であってもどう使うかで、光り輝いてくる。そこに携わるのが「観光」と捉えると、実に興味深い学問になっていくと思います。

**梅田** では、青木先生にもお聞きします。西アジアにも世界遺産がたくさんありますよね。よくいわれることですが、観光化によって遺産が破壊される側面もあれば、逆に維持しようとするベクトルが働くこともあると。

**青木** 観光資源として「これはお金になる。だから遺跡を保護しよう」という動きは当然

あります。例えば、イランの「ペルセポリス」は壊す計画があったところを、お金になりそうだから残そうと。ただ、ペルセポリスの場合、観光地を管轄しているのは軍ですから、色々問題があります。

**梅田** なるほど。観光化することによって文明遺産が維持されるというベクトルも当然存在するし、一方で観光化によって消えていくものがある。消えていくから否定しても仕方がないということでしょうか。

**石本** 例えば国内でいうと、京都が圧倒的に観光客が多く、京都市民は観光客に嫌悪感を持つほど、自分たちの日常生活が侵されるところがありました。ところがコロナ禍で観光

客が来なくなると、京都市としての歳入が激減し、どれだけ観光客からの恩恵を得ていたか、よくわかったわけです。ただ、やはり観光客によって悪影響が出るのは確かで、自治体も含め、市民と協力しながら、歳入と市民生活をどうコントロールするのか、今後の大事な視点になると思います。

**梅田** 学生たちは幸か不幸か今年のコロナ禍による観光の光と影を目にしたわけです。それを踏まえて、先生方は今後の観光のあり方をどう教えていかれるのか、お伺いしたいのですが。

**石本** 観光客や旅行者、あるいは旅行会社や航空会社の視点だけでなく、観光を創出

### 観光によって輝く未来を創造できるような人材の育成を

教授 文化政策学部長  
**梅田 英春**  
文化政策学部 芸術文化学科

教授  
**石本 東生**  
文化・芸術研究センター  
大学院 文化政策研究科

教授  
**青木 健**  
文化・芸術研究センター

**梅田** 2019年4月、本学の文化政策学部にて「文明観光学コース」が開設されました。この約2年間の手応えはいかがですか。

**青木** このコースは、単に観光だけでなく、そこに文明的な視点を持ち込むという非常にユニークな形を取っています。その理念にどれだけ学生たちが共感してくれるのか、開講当初不安もありましたが、私が担当している「ユーラシア文明論」も、横山学長と石本先生と3人で担当している「文明と観光」も比較的出席率が高く、学生たちの共鳴を感じています。

**石本** 青木先生が言われたように、本コースは文明がベースにあるので、授業でも地域の

持続可能性を視野に入れた観光のあり方を語るように心掛けてきました。すると、単なる観光というより、地域振興に興味を持つ学生たちが増え、文明観光という領域に共感しているという手応えを感じています。

**梅田** やはり本コースは文明という、とてつもなく大きな概念の言葉が使われていることに特徴があると思います。文化ではなく文明だということ、その文化と文明の違いを青木先生は学生たちにどう説明しているのでしょうか。すごく重要なポイントだと感じますが。

**青木** 私が念頭に置いているのは、主に規模的な問題で、文化というと100年単位の人間の営みを意味し、文明というと1000年単

位と捉えています。では、文明という概念をどう観光に落とし込んでいくかですが、現在はシルクロードを視点として、西アジア、中央アジア、東アジアの各文明が交差するところから何が生まれたのか、それが21世紀に起こりえるのか、そんな切り口で授業を行っています。

**梅田** 今度は石本先生にお聞きしますが、観光は非常に経済に影響しますよね。経済としての観光をどう捉えているのか、文明観光学は文明寄り、経済学寄りではないのか、その辺りはいかがでしょう。

**石本** 確かにビジネスとしての観光を全く扱わないわけではありませんが、少し切り口が違って、例えば、観光は通常、平和産業とい

する自治体や地域住民側の視点で「観光まちづくり・観光地域づくり」を学修テーマとして考えています。観光地として魅力あるまちや地域をソフト・ハード両面から、どう創造していくのか、まずはその方向性でまちづくりに取り組もうと思います。

**青木** 文化・文明は異質なものと混じり合ったとき、あるいは国難があるときに底力が試されると感じます。イスラーム圏でいえば、中東よりも東南アジアのほうが、華僑がいたり、植民地時代の経験があったりして、イスラーム・ツーリズム、イスラーム金融が先行し、その中心地が東南アジアに移ってきています。それがコロナで今後はどう反応を示すのか、注意深く見ていくべきだと思っています。

**梅田** お二人のお話を聞いて、この文明観光学コースは、単に、旅行会社や航空会社に入りたいという人材を輩出するために設立されたのではなく、半歩先、一歩先を見据えていることがよくわかります。ゲストではなくホストの視点で、将来どんなまちをつくるのか、あるいはどんな地域で、海外で、観光が花開くか考えてクリエイティブしていく。それらを導く必要があると感じました。では最後に、今後このコースでどんな人材を育てたいのか、お聞かせ願えますか。

**青木** 文明観光学ですから、広くグローバルな視点を持ち、かつローカルな視点も兼ね備える必要があると考えます。複数の文明を見ながら、人類の進む道まで頭に入れ、21世紀

の知的活動の一環として観光をとらえ、観光をデザインしていけるような人材が育ってほしいと思います。

**石本** 地域が本当の意味で持続可能な観光発展をしていくために、自治体にもしっかり目を向けて、同時に旅行産業を視野に、そんなバランス感覚に優れた人材を育てていきたいと考えています。

# 02

## クローズアップ

### 匠

Takumi Design

2019年度からデザイン学部の新設された領域「匠」。  
スタートしたばかりの新たな学びについて  
語り合ううちに見えてきた、本学、匠領域ならではの  
特長、魅力、さらに、道具に対する想い。



います。ですが、ただ戻るだけでなく、今の若い人の新しい感覚をとおして再発見し、再考・再構築していくことが本学におけるデザインの中の工芸の魅力だと思いますね。もちろん古い道具など必要不可欠なものがたくさんある中で、現代の道具の中に、これなら代用ができそうかも、みんなで知恵を絞ってアイデアを出し合えると良いと思います。

**伊豆** 逆にいうと江戸時代までは伝統工芸＝デザインだったわけで、むしろ明治以降、特に昭和になってから工芸とデザインが分離して、というか。

**藤井** そうなんです。明治以降の、西欧においても美術が純粋美術と応用美術に分化し

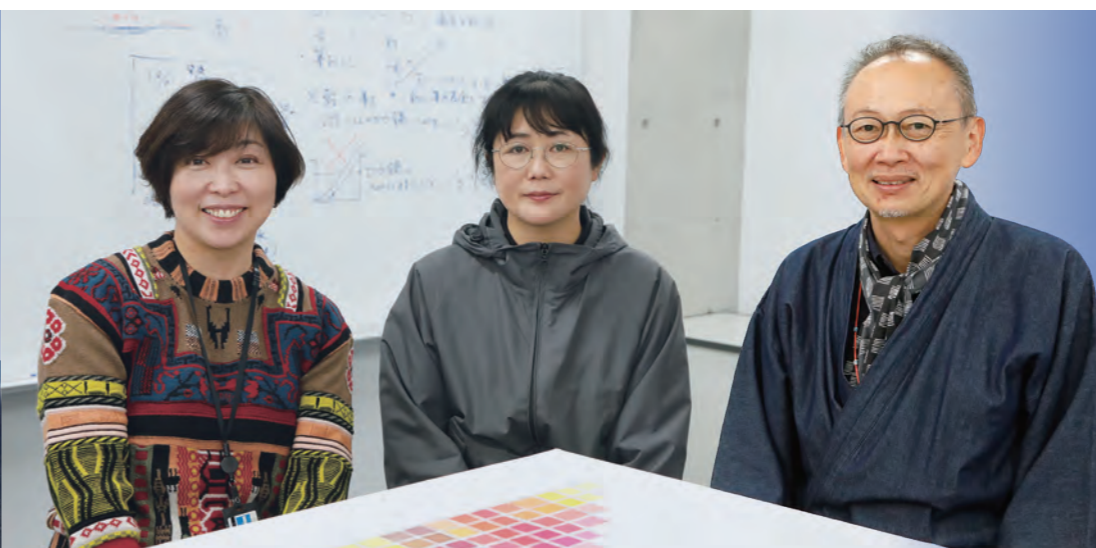
ていく動きに呼応して、工芸と美術が分離すると同時に、特にものづくりでは西歐的な工業生産を取り入れて発展しようとする時期にデザインが生まれたため、まさにその近代の申し子みたいところがあったわけです。でも、立ち返ってみると、デザインの根本には工芸があることが見えてくるし、工芸からデザインを考えると新しい発見もある気がしますね。

**新妻** 江戸時代以前ですと朝鮮半島や中国からの影響が色濃く残っています。それが近代になると西歐からになってくるので、これからはそれらをもっと深く理解して、発想して、ということになるのかなと思います。

**伊豆** 学生たちはどうですか。彼らにそのような感覚はあるでしょうか。

**藤井** 私の感覚ですけど、彼らの土台にはすでに西洋的な生活や考え方があるので、かつてのヨーロッパの人たちが日本の文化に接して驚いたように、内にいながら外から評価をしているように見えることが、とても面白いと感じています。それが新鮮ですね。そこから学ばせてもらうこともあります。ただ、その考え方だけに賛同するのではなく、「従来はこうだった」とか「君たちがやっていることは長い歴史の中にあるんだよ」ということも一緒に教えると、知識と自分の経験の両方から学べるという良さがあると思うんです。

## 道具を大切にすることから創造が生まれ、人とのつながりが始まる



教授 図書館・情報センター長  
前デザイン学部長  
**伊豆 裕一**  
デザイン学部 デザイン学科(ビジュアル・サウンド領域)  
大学院 デザイン研究科

教授  
**藤井 尚子**  
デザイン学部 デザイン学科(匠領域)

准教授  
**新妻 淳子**  
デザイン学部 デザイン学科(匠領域)

**伊豆** デザイン学部で「匠領域」ができたのは2015年の末頃、川勝知事から「県産材を使った伝統建築を教えるはどうか」というお話をいただいたことがきっかけです。そこで、せっかくなら他の工芸も加えた領域を作ろうと、名称を「匠」と定め、2016年から準備を進め、2019年度に開設となったわけですが、みなさん、いかがですか。匠領域がスタートして。

**新妻** 建築については「県産材を使用して」というお話を聞いていたので、新設科目の「木造建築演習」の中で林業家と製材所の方との中継授業を始めています。

**藤井** 染織では2019年度末に新しい工房が完成して、2020年の春に晴れて学生にお披露目となるはずでした。ところが、コロナ禍の影響で残念ながらもなわずにいましたが、後期からようやく実働できてよかったと思います。

**伊豆** 匠領域の目的として、静岡県における伝統産業の振興や観光振興、あるいは伝統産業の後継者育成もあり、他の大学の状況も含めいろいろと調査をしました。その結果なかったことの一つが、伝統ある美大などではもともと工芸科があり、後からデザイン科ができ、工芸が先輩、デザインは後輩のような感じということです。ですが、本学のようにデザインありきで、工芸・匠というのは、私は全国初のケースではないかと思っています。そこで今世界

で注目されている日本の伝統技術に、学生の新しいデザインを取り入れたいという気持ちがあるのですが、先生方はいかがでしょう。

**新妻** 伝統建築は、それを支える匠(技能者)の技術や知識を継承していかなければなりません。ですから、匠とどう協働していくかがすごく重要で、その点については授業やワークショップの中で経験ができるようにと考えています。道具を作る人がいなくなってしまうという問題は、工芸の分野でも生じていると思います。

**藤井** 匠領域では、デザインが主流となっている現代社会のものづくりにおいて、もう一度ものづくりの原点に戻って考えたいと思っています。

**新妻** そうですね。やはり大学なので、ちょっと知っているというだけではなく、もう少し踏み込んだ研究をするとか、専門領域では学生たちの身になる学びがしっかりとできるようにしたいと思います。

**伊豆** じゃあもう、先生の学生達はちゃんと自分で道具を研いだりとか。

**新妻** まだ2年生なので、そこまではなかなかいかないですね。作業台を作りましたが、やはり道具を上手く扱えるようになることがひとつの大きなハードルです。3年生になったときに、そういう希望があれば、だいぶやらなければ、と思います。今は2年生ぐらいまでに、根底にあるものを広く学ぶことができれば良いと思っています。

**藤井** イチロー選手じゃないですけど、道具の大切さは、おのおのの経験から身をもって知ると思うんです。制作の只中で必要な道具だけでなく、次の作業をするための道具を事前に準備することや、道具を大切にすることが作品の完成度と関係していることを、今まさに学んでいるように感じます。それが身につくと、自分で道具を使いやすいように工夫して、表現も豊かになると思います。

**伊豆** 道具を使いこなせると上級生と下級生、先輩後輩の関係が強くなっていくような気がします。そこからこれまでとはまた違う、大学の伝統みたいなものができるといいと思いますね。

**新妻** そうですね。上級生がしっかりと下級生に教えてあげられるといいですね。

**藤井** いい意味で先輩風を吹かせてほしい。デザインは今やコンピュータ1台でもできる時代です。同時に、コンピュータの根っこにあった、さまざまな道具類も知らないと、道具に使われてしまうので、上級生が自らの経験を下級生に伝授しながら、「自分らしい道具の使いこなし方」に自ら気づく大切さを感じてくれれば良いなと思いますね。

# 03

## クローズアップ

### フェアトレード

Fair Trade

フェアトレードの推進活動を行う学生団体「りとるあーす」の発足から、フェアトレード大学の認定、そして、「はままつチョコプロジェクト」へと取り組みが進む中で、それぞれの時代の代表として活躍したメンバーが集結。担当教員を交え、これまでの歩みを振り返った。



対談  
×  
座談会

天野 佑貴子

2015年卒業  
フェアトレード学生団体「りとるあーす」  
初期メンバー

日比野 都麦

2020年卒業  
「りとるあーす」フェアトレード  
大学認定時のメンバー

長屋 櫻子

文化政策学部 国際文化学科4年  
学生団体「はままつチョコプロジェクト」  
メンバー

教授 国際文化学科長  
下澤 嶽  
文化政策学部 国際文化学科  
大学院 文化政策研究科

**日比野** 日本初、アジア初ということが、思った以上に注目されていると感じました。大学の先生方や事務の方は「すごいね。頑張ったね」と喜んでくださいましたが、学生たちの反応は「何か特殊なことをやっている」という感じで、その特殊感をなくせばもっと浸透し、盛り上がったように思います。認定を取った後に始めたのが「チョコプロジェクト」です。それまでは先輩たちが作った土台を守っていく活動でしたが、初めてゼロからプロジェクトを立ち上げることに取り組みました。

**下澤** 誰かのものを「売る」という活動から、実際に「作る」という活動に転じたわけですが、そのチョコプロジェクトに参加して頑張っている長屋さんはいかがですか。

**長屋** やはり、難しいなというのが印象です。チョコレートの素材である「カカオ」を仕入れるため、フィリピンに足を運んで農家さんと交渉して、という作業が想像以上に大変で、今もまだやりとりが続いている状況です。フィリピン自体がそんなに簡単に行ける場所ではないし、連絡の手段も限られている。

**下澤** おまけにコロナで、日本への輸出ができなくなると言われ、深いトンネルの中にあるような状態ですね。

**長屋** 結局、当初予定していたチョコレートの発売が1年延期され、2021年の12月になりました。ただ、それまでに時間があるので、今企画しているものにプラスして他のチョコレートも作れないか、それを詰め合わせにしたらどうか、

などの案も出てきているいろいろ検討しているところです。延期になったことは残念ですが、逆によかったこともありました。

**下澤** 3人にお聞きしますが、実際にフェアトレードの活動に関わったことで、自分が変わったことや役に立ったことはありますか。

**天野** 買い物をするときに原産国表示を見ようになりました。どこで作られているのか気になりますし、フェアトレードでなくても、できるだけ地域のものを買いたいという意識が芽生えました。私は今、通関の仕事をしています。中には何でこれを日本に輸入するんだろうというものがあるんです。そのときに、フェアトレード商品がなぜ輸入されるのかを考えた時、そこでしか作れないという理由があるから輸入され

## フェアトレードを普及・推進していく難しさと楽しさを味わいながら

**下澤** 2012年にフェアトレード学生団体「りとるあーす」が発足したときのリーダーとして、天野さんが当時一番思いに残っていることはどんなことですか。

**天野** 当時はまだ「フェアトレード」を知らない人が多かったので、その言葉を大学内の学生に知ってもらおうというのが始まりでした。最初の活動は、フェアトレード食品で作った軽食を大学祭で販売する取り組みです。その後は浜松市内や周辺地域のフェアトレードショップ巡りをするなど、先生が提案されることをとにかくやってみるという感じでした。

**下澤** いろいろ投げかけたことを全部動いてやっていたので、すごく忙しそうでしたね。

**天野** 中でも「バレンタイン一揆」という啓発映画を上映したこと、フェアトレードのチョコレート

を学内で販売したいと理事をお願いに行ったことはよく覚えています。また、静岡県立大学のグループとも交流があり、静岡市の青葉シンボルロードと一緒にフェアトレードマーケットのイベントをやったことも印象に残っています。

**下澤** 当時は、現在の活動の4、5倍は動いていたんじゃないかと思えますね。

**天野** 確かに大変なこともありました。仲間と一緒に何かを作る体験がすごく楽しかったです。フェアトレードという言葉がだんだん知ってもらえるようになってきたなと実感できたことがうれしかったですね。

**下澤** 日比野さんはいかがですか。私が「フェアトレード大学」にしようと思って徐々に準備を重ね、いよいよ佳境に入った2017年に、中心となって活動してくれましたね。

**日比野** フェアトレード大学の憲章づくりが一番印象に残っています。イギリスがフェアトレード大学の発祥地なので、その憲章を見てみようというところから、「TABEBORA (タベボラ)」(カフェスタイルでフェアトレードの啓発・推進に取り組む学生団体)の代表たちと一緒に始めました。

**下澤** 当時は、りとるあーすとタベボラのメンバーが集まっているいろいろ案を出し合い、大事なキーワードを絞り込んでいましたね。

**日比野** みんな積極的に考えてくれて、後輩たちもフェアトレードに共感してくれたり、熱い思いを持っていてくれたりすることがうれしかったです。

**下澤** 認定を取ったときはどうでしたか。取材も多かったと思いますが。

続けるのだと思ったんです。なので、そこで作られていることに意味があるのだと社会に出たら気づきました。

**日比野** 私は新聞社で働いているので、国内外の社会の動きを見ることが多く、不平等を感じる事がよくあります。フェアトレードに限らず不平等は是正しなければいけないと考えて、動いている人も世の中にはたくさんいるのですが、不平等というのは事実や現状を「知らない」ことから来るんじゃないかと思うんです。そう考えると、私が大学時代、フェアトレードという活動があることを大学内だけでも知らせようと頑張ってきたことは、間違っていないのかなと思います。

**長屋** 私も天野さんと一緒に、自分が買うものがどういう過程で、どういったサプライチェーンを経て、私の手元に来ているのか考えるよう

になりました。私はアクセサリが好きで、自分で作ったり見たりしますが、きれいなダイヤモンドを見ても、本当にきれいだと思わなくなりました。なぜなら、その影には強制労働や環境破壊、児童労働といった問題が潜んでいるからです。そういうことを知って、私は人や環境に配慮したジュエリーを作っている会社の代表に、話を伺いに行くことにしました。

その方の話は感動することばかりで、会いに行ったら本当によかったと思います。私が一人で取材に行くなんてことができたのは、「関心」があったからこそで、そんな関心を持たせてもらったことが、フェアトレードをやったよかったと思う一番の理由です。



# 04

## クローズアップ

### 地域協働プロジェクト

Projectability

2013年～2015年に行われた  
地域プロジェクトを対象とした研究事業「プロジェクトタビリティ」。  
そのプロジェクトを主催した3名の教員が  
当時を振り返りつつ語った、本学の地域協働プロジェクト。



## 鼎談

**磯村** プロジェクトタビリティが始まったのは、地域にある「クリエイティブサポートレッツ」という知的障がい者支援施設と協働で、自発的な地域の活動をしている浜松市民を取材してその活動を研究発表しようというのがきっかけでした。

**谷川** 私の場合は比較的早い段階で地域の人たちと関わりを持つようになって、一緒にプロジェクトをやったり、展示会を開いたりを散発的に実施してきました。そのうち今度は同じ活動をする同士がつながる場があるといいね、ということで、「浜松のおもしろい活動を見える化するプロジェクト」をやらせよう、という話が持ち上がったのが始まりです。

**磯村** そして1年目に、14のプロジェクトを発信するための展示会を開きました。とはいっても、各プロジェクトの人たちが展示するのではなく、私たちがリサーチ、解釈してアート化、現物として展示するというものです。それを街中の閉店した書店を借りて、ひと月ほど行いました。ビルの中を外部的にしようとして、アルミ箔の落ち葉を作って床に敷き詰めたんですけど、結果的に展示会を見に来た人が歩く道でだんだん道ができてきて、回遊活動がよくわかる仕組みになったんです。

**谷川** 仕掛けとしてはすごくおもしろいですよね。見に来られた方がどの展示物に強い関心があるのか、それと展示者との関わりがけの道でわかるので。

**磯村** 1年目はそんな展示会を開いて、冊子にまとめました。2年目はそれをもう少し絞って掘り下げよう、3年目は、さらに横の連携と活動指標を考えてみようとして実施することにしました。

**日比谷** 私の場合は2年目からの参画でした。14の中から5プロジェクトを選んで掘り下げていく段階で加わったので、ひとつのプロジェクトを追いかける中から全体をイメージするという関わり方をしています。

**磯村** 3年目は文政の高島知佐子先生にも理論的バックボーンとして加わっていただいて、それがどういう理論で裏付けられるのか、補強されたところがありました。例えば、プロ

ジェクトタビリティが、今までやってきたことが、実は発達のワークリサーチのような手法をとっていたということが逆にわかりました。

**日比谷** 私は1年目の状況というのがよくわからないのですが、「この浜松の街で起きていることはどうしてこんなにおもしろいのか」が当時のキーワードになっていました。そこを先生方に向かってみてみたんですけど、14プロジェクトを振り返って、印象はいかがですか。

**磯村** そうですね。活動の開き方がなかなかいいなと思いました。みんなうまい具合に施設や場所を決めているんです。それはシャッター商店街だったり、空き家だったりするんですね。このプロジェクトの人たち

はそういう社会的課題にも自分たちのやり方で関わって、うまく解決するんだけど、それを生活の中でやっているのが、おもしろくなっている。だから街は空洞化しているけど、空間とか建築側からすると、スカスカだからこそのよさがありますね。

**谷川** プロジェクトというイベントをイメージして、それをいかに成功させるかという話になるんですけど、そうではなく、磯村先生が「スキマ」と言われましたが、そこをいつもと違う埋め方を発見した人たちがいた。そういう例が浜松にはあって、それを引き出したかんんです。そのまとめ方、整理の仕方として、磯村先生や日比谷先生が視覚化してくださったのが、私はすごくおもしろく感じました。

**磯村** 日比谷先生は特にグラフィック専門なので、2年目に冊子をたくさん作ったときに直接もしくは監督として関わっていただいて。

**日比谷** そうですね。2年目は学生も絡めているんです。学生がエディトリアルデザイン一式を実践できるいい機会だったので、非常にありがたかったですね。取材も学生がやって、それを記事にまとめて写真を撮って、挿絵も中に入れることができました。学生たちも大学の課題だけでなく、実際に社会に出てどうデザインが役立つのか、ある程度イメージできたんじゃないかと思いますね。

**谷川** 学生たちも含めて一緒に作業に携わる、当事者に近い感じの時もあれば、冊子の

## この街で起きていることはどうしてこんなにおもしろいのか

段階で先生方が視覚化していただくとか、文章としてまとめる。それから高島先生のように、いわゆるマネジメントという側面で評価のサイクルを位置付けてどうなるか、アカデミックなアプローチを結びつけるとか。いろいろな方法で関わり合えるのが、この大学らしさという気がします。

**磯村** それをカッコよく言うとか、先ほどの発達のワークリサーチの概念になって、今では立派な研究方法なんですね。客観的なことばかりやるのではなく、現場に関わりながら結果をもう一度考え直すとか、フィードバックして次につなげる。それが先端的研究施設でない、地域の大学でのやり方かと思えますけどね。

**谷川** 浜松における文芸大の役割って、直接地元の方たちとつながることが、背景としてあると思うんですけど、一方で俯瞰的に見る、いわゆるアカデミックな役割もしながらという感じがしますね。

**磯村** 地元で根付いて設計をしたり、まちづくりをしている卒業生・修生が意外に多く、私はそういう元学生たちとも関わりながら、ぜひ応援したいと思っています。実際に一緒にプロジェクトをやっている場合もありますし、そんなつながりも大事にしたいですね。

**谷川** 私も今、浜松市と関係のある別のプロジェクトに関わっているんですけど、地元にいるデザインや建築に関わっている人たちが

ピックアップしてみると、わりと文芸大の卒業生がいて、ここで蒔かれたタネが芽を出しているなど感じます。

**日比谷** そうですね。「浜松というまちに対して何かしたい」と、地域に関わる仕事をしているデザイン事務所を就職先を選ぶ学生も少数ながらいます。そういう意味では、今後もまちづくりとつながっていくように思いますね。

脚注  
※1 発達のワークリサーチは、活動の現場を担う人々と研究者がともに活動システムの視点から活動を分析し、拡張的学習を導く実践的方法論



昔話や伝説は  
地域と家庭に語り継がれた  
心と記憶の文化遺産

# 05

クローズアップ

## 地域とのかかわり

Interaction with the community

浜松市北部の中山間地域で  
民話の採録調査に取り組む「伝承文学ゼミ」。  
その担当教員と卒業生、在学生在が語り合う  
地域の人たちとの関わり、採録調査への思い。

対談  
×  
座談会



### 中西 彩綾

水窪での民話の採録調査に取り組み、「水窪のむかしばなし」(三弥井書店、2015年3月)を上梓。2016年3月卒。企画制作会社でプランナーとして勤務後、現在は株式会社メーカースマークでライターとして勤務。岐阜県出身。

### 米川 沙弥

国際文化学科4年生。1年間のアイルランド留学を経て2020年4月から復学。現在は水窪町上村に伝わる「蛇籠入り」を解析中。石川県出身。

### 伊藤 優華

春野での民話の採録調査に取り組み、「春野のむかしばなし」(三弥井書店、2019年3月)を上梓。2020年3月卒。現在は掛川市立原野谷中学校で国語科教諭として勤務。三重県出身。

### 教授 二本松 康宏

文化政策学部国際文化学科教授。専門は日本文学(伝承文学)。長野県出身。

話を聴きに行っても「ああ、あの」ってすんなりと受け入れていただけています。ありがたいなと思います。

**二本松** そう!! ほんとそれ!!

**米川** 先生がお年寄りに聞きたいことを直接聞いてはダメとよくおっしゃるんですけど、どう聞き出せばいいのか、何かテクニックがあればお聞きしたいのですが。

**中西** 最初は「何か昔話を知ませんか」って直球で聞いていたので、相手はポカンとして。いきなり「昔話を語ってください」と言っても無理ですね。まずは雑談から始めて、こちらのことを話したり、相手の方の子どもの頃の話やご家族のことなんかを聞いたりして、だんだんと打ち解けてゆくところからですね。

**二本松** その雑談が次へ繋がってゆくんですよ。そういえば中西さんは門桁の地域解説を担当して、門桁へは何度も通いましたね。あのラーメンの話。

**中西** あのラーメンの話ですか。門桁の、ある一人暮らしのおばあちゃんの家に行くと、いつもラーメンを出してくださるんです。

**二本松** そうそう、その話。これはゼミでも語り継いでいるんですよ、私が。門桁って買い物に出るのも大変な地域じゃないですか。インスタントラーメンだっとなんかおきなんですよ。それで、わざわざ浜松から若い女の子が来るからと思って、若い子が好きそうなインスタントラーメンをふるまってください。そのおばあちゃん心づくしを思うと涙が出そうになる。「思いに伝える」っていうゼミのポリシーの一つは

そこから生まれました。伊藤さんはどうですか。米川さんに伝えたい調査のコツとか。

**伊藤** これは地域解説を書くときの話ですが、その地域のことを知りたかったら、別の地域の人に話を聞いたほうがいい場合があります。客観視されているっていうか。「隣の地域のあのことについて教えてください」って質問すると、別の視点からその地域の話聞くことができます。

**二本松** そう!! さすが伊藤さん!! 米川さん、今のはぜひ覚えておきたいですよ。

**米川** ありがとうございます。ぜひ参考にしたいと思います。

**二本松** そろそろ話をまとめないと。皆さんのそうしたご苦労を経て、これまでに6冊の書籍

### そこに暮らす人々の誇りと尊さ、その思いに応えたい

**二本松** 中西さんは最初に水窪で昔話の採録調査を始めたときの幹事でしたね。幹事として、その頃の思い出はありますか。

**中西** はじめて水窪協働センターへ行って、調査の趣旨を説明して協力をお願いしたときが一番緊張しました。それが最初の一步だったので、よく覚えています。

**二本松** なにしろこちらはまだ何の実績もなかったからね。

**中西** 採録調査では、まずお年寄りに集会所へ集まっていた「集団採録」から始まりますが、そこからもう大変でしたね。なかなか集まらないときもあったし、おおぜいが集まり過ぎて学生1人でいっぺんに6人くらいのお年寄りの話を聴かなきゃならないときもあったりして。おじいちゃんたちが酒盛りを始めちゃったり(笑)

**二本松** 中西さんたちの調査はホントに手探りから始まりましたからね。でもそのおかげで今日に至るゼミの採録調査のノウハウができました。伊藤さんは春野で初めて採録調査をした学年ですね。どうですか、何か思い出とか。

**伊藤** 私たちが春野で最初に採録調査したのは花鳥というところの集会所でしたが、そのときはぜんぜん話を聴き出すことができなくて。1回目の調査はそうなる先輩たちからも聞かされていましたが、さすがに自分たちのスキルの未熟さを痛感しました。

**二本松** 1回目の採録で「なんの成果も得られませんでした!!」ってのは、もはやゼミの年中行事だね(笑)

**伊藤** 「個別採録」でご自宅へ伺うときは、前日に「明日行きますね」って確認の電話をし

てから行くんですが、行ってみたらお留守で、アポを忘れられちゃってることがありました。

**二本松** あと、おばあちゃんに個別訪問の打ち合わせをしようとして電話したら、電話に出たおじいちゃんに特殊詐欺と思われてガチャ切りされちゃったりとか(笑)

**伊藤** それでも何度か通っているうちにだんだんと孫のように接してくださるようになって。「また来てね」って。

**二本松** 米川さんは先輩たちの話を聞いてみて、何か思うことや、この機会に聞いてみたいことはありますか。

**米川** 私は今、水窪の上村で「蛇籠入り」の伝説を調べているんですけど、やはり中西さんたちが切り拓いてくださった「地域との信頼の絆」を実感します。そのおかげで私たちが

を刊行してきたわけですよ。水窪で3冊、龍山で1冊、春野が2冊ですね。今年度は春野で3冊目の書籍を目指しましたが、新型コロナウイルスの影響で前期は採録調査を断念しました。そのかわり、テーマを「災害伝承」に絞りました。実は以前からやってみたかったテーマなんです。後期の限られた時間と条件の中で3年生6人がそれぞれ1話を担当して、6つの災害伝承を紐解きます。薄い書籍にはなりませんが、これまでどおり三弥井書店から刊行される予定です。それでは最後に皆さんからどうぞよろしくお願いします。

**米川** 私は日本のことがもっと知りたくて海外に留学し、帰国後、このゼミに入りました。卒業後は公務員を希望しています。このゼミで学び、体験したことは、将来に向けて必ず役に立つスキルになると思っています。

**二本松** アナログなコミュニケーション最強説ね(笑)

**伊藤** 私は教員採用試験の面接でもゼミでの取り組みを話しました。今、中学校の教員として授業を行うときも、ゼミでの活動や本を作った経験が活かされていると思います。過去だけでなく現在も、そして未来にも生かされていくんだと、少し不思議な感じがしています。

**二本松** この「水窪のむかしばなし」や「みさくぼの民話」は水窪中学校の「総合的な学習の時間」でも使っていたいたんですよ。

**中西** それはうれしいですね。そう考えると、すぐ意義のあることができたんじゃないかなと実感しています。私自身も、この本に携わっていただけなかったら、今、ライターになっていなかったと思います。

**二本松** 今度の災害伝承の書籍では中西さんの会社にデザインと編集をお願いしています。こういう形でOGと一緒にまた仕事ができるのも嬉しいですね。



# 06

クローズアップ

## 国際交流

International Exchange

グローバルに活躍できる人材の育成を目指し、  
様々な国際交流を行っている本学。その取り組みについて、  
主に2010年以降の展開を取り上げて語り合う  
「これまでと現在、そしてこれから」。



対  
談

教授 英語・中国語教育センター長  
**池上 重弘**  
文化政策学部 国際文化学科  
大学院 文化政策研究科

教授  
**高山 靖子**  
デザイン学部 デザイン学科(プロダクト領域)

**池上** 本学は2004年に韓国の大学と初めて交流協定を結んで以降、協定校を着実に増やし、第2期中期計画で交流協定校を20校と決めました。2018年には協定締結の手続きを簡素化し、「アジアにおける英語圏の大学」「デザインを英語で学べる大学」など5つの方針を決めることで、加速度的に拡大が進みました。

現在、交流協定校は締結最終段階を含めて16校、2021年度末までに何とか目標をクリアできそうな状況です。中でも協定校の一つであるトルコのイズミル経済大学とは、本学らしい特色ある交流が行われています。

**高山** そうなんです。イズミル経済大学は、私が国際会議で研究発表をした時に、その研究テーマに興味を持たれた同大学のイギリス人の先生から申し出があり、交流が始まりました。その後2014年から毎年トルコと日本で交互に、デザインのワークショップを開催しています。テーマは毎回地域の問題を取り上げ、グローバル企業の若手デザイナーの力も借りながら、地域に「デザインによるソリューションを」提案するという試みを行っています。

**池上** 今後の交流協定先としては、多文化共生の先進地域でもあり、デザイン分野でも特色のある「北欧」を視野に入れています。

また、本学が国際アートデザイン系大学連合「CUMULUS」に加盟したことで、ネットワークがさらに広がることも期待されます。

次に留学生の受け入れについてですが、今後の受け入れ拡大に向けて2019年に、過去の留学生動向を調査したところ、「人数は全体的に増加傾向にあり、交換留学生が増えている。2011年以降は大学院生が大幅に増加。ここ数年は文化政策系よりデザイン系の学生が多い」といったことなどがわかりました。

文化政策学部にいる中国や台湾の大学院生に話を聞くと、自国内での就職を希望しているようですが、デザイン学部の留学生はいかがですか。

**高山** そうですね。韓国の学生に関しては、韓国国内での就職が難しいこともあって、日本での就職を希望する学生もいます。その時、その国の就職事情にもよりますが、中国も今は高学歴でないと就職が難しく、学位を求める学生も多いようです。

**池上** 今度は本学の学生の海外派遣についてです。開学直後から自力で開拓して留学する学生もいましたが、その後は交換留学、つまり協定を結んだ大学に休学しないで留学できるようになり、毎年韓国やアメリカなどの大学に一定数の学生が留学しています。他に、夏季休暇を利用した語学研修や、もち

ろん今も、自力開拓で休学して海外に行く学生もいます。

**高山** 韓国人や中国人の専任教員など、その国の窓口となる教員が本学にいれば、フォロー体制ができるので、学生たちは安心して留学できるようですね。

**池上** そう思いますね。では、次に本学学生の海外でのインターンシップですが、これも非常に特色があります。例えばかつて紛争地域だったバングラディシュのNGOでインターンシップを行う学生がいます。一方で、グローバルビジネス最前線のシンガポールでも本学独

自のプログラムがあり、かなり幅のあるインターンシップを展開しています。

ところで、浜松はブラジル人が多く、彼らの子供たち世代でグローバル人材が現れ始めていて、毎年優秀な学生が入学してきます。デザイン学部にもいますよね。

**高山** そうですね。少なくとも私のゼミの卒業生だけでもブラジル人、韓国人、フィリピン人がいて、3人とも地元浜松で就職し、現在デザイナーとして活躍しています。

**池上** そうした人材を次の世代につなげようと、本学ではブラジルの伝統的なお祭り

### グローバルをキーワードに教育と研究の深化を図る

「フェスタ・ジュリーナ」を2年に一度開催しています。その中で学生たちがお祭りを見学に来た外国人の子供たちとその保護者に、ポルトガル語やタガログ語を使ってキャンパスツアーを行い、大学のことや勉強のことを丁寧に伝えています。このイベントは特色ある多文化共生事業として、全国的によく知られています。

**池上** 今後についてですが、今の英語・中国語教育センターを「多文化・多言語教育センター(仮称)」ないし「多言語・多文化共生機構(仮称)」に変えようという動きがあります。これは英語・中国語を核として、より多様な文

化、多様な言語を積極的に取り込んでいこうという意図からです。

また、これまで本学が示してきた重点目標研究領域をさらに発展させた新しい研究ビジョンとして「持続する社会のためのグローバルデザイン」を掲げています。グローバルなものがローカルにどんな影響を及ぼすのか、ローカルなものがグローバルな光の中でどう輝くのか、それらを視野に入れて、今後の国際交流を進めていきたいと思っています。

**高山** 教育のバックアップ体制としては、コミュニケーション力強化の一つとして、数年前から「Design English」という授業を始め

ています。これは通常の語学の授業とは異なり、実際のデザインの現場で交わされる辞書にはない感覚的な表現を学習する実践的な授業であり、自分の作品を英語で表現したい学生たちの意欲を高めています。

また、今後の交流の在り方についていえば、例えば教員自身が、国際会議や国際シンポジウムなどに参加できる機会をバックアップすることによって、共同研究や研究情報の交換等、より広く深く有意義な交流に発展させることができるのでは、と考えています。



## 01

## 卒業生だより 平山 拓也

Hirayama Takuya

文化政策学部 国際文化学科 卒業  
入学年：2000年

日本ケミカル工業株式会社 営業部 海外営業グループ

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

「大学生活ってどんな感じなんだろう？どんな経験ができるだろう？」ってワクワクしていました。でも、受け身の姿勢で得られるものなんて何もなかったです、1期生なので。最初は高校生活の延長みたいな感じで、部活やサークルはゼロから作らなきゃ何もなかったけど、それがよかったです。自発的に考えて動いてゼロからつくる面白さを実感できました。

大学での思い出は何かありますか？

やはり大学時代の思い出といえばバックパッカーとして一人旅をしたことです。大変なこともたくさんありましたが、自分が世界の一部しか知らないことを実感できて、それ以上にニュースやインターネットではわからないことをたくさん知ることができ、いろいろなことを経験して、どんどん自分の世界が広がっていく感覚を経験できたいい思い出です。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何でしたか？

フィールドワークやプレゼンテーション、ディベートなど実際のビジネスでも活かせる講義があったことです。基本的な考え方を大学で学ん

でいるだけでも、仕事に取り組む際のプラスαの自信になります、なのでビジネススキルを学べる講義があったことが良かったことです。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

フィールドワークの授業で「情報は発信者のフィルターを通した情報であることを意識するべきだ」この言葉は今でも私の一つの行動指針。情報は活かすことができれば武器にもなるけれど、誤った情報を鵜呑みにすれば毒にもなる。マーケティングなどで情報を取り扱う際に思い出す、大切な学びの一つです。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

ローカルからグローバルに活躍する人材の育成、その為の学びの場として地元企業との協業の場、社会人との交流の場など実践的な学び場の提供を期待しています。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

世界の広さを決めるのは自分だし、いま見えている世界だけが自分の世界だと思わずに、新しい世界にどんどん挑戦して行ってください。新しいことへの挑戦は大変なこと多いかと思いますが、何事も簡単に感じる前は難しいものです。若いうちの失敗は挽回できるので、自分の世界をどんどん広げてください、大学は世界を広げる方法を学べる場です。



## 02

## 卒業生だより 鈴木アリネ由香里

Suzuque Aline Yukary

文化政策学部 国際文化学科 卒業  
入学年：2012年

スズキ株式会社 海外四輪営業本部四輪アジア部



入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

高校への通学ルートに文芸大があり、毎日横を通っていました。とてもユニークな建物が印象的で、芸術色が強いなと思っていました。進学先を考え始めた頃に、国際文化学科のことを知りました。国際関係や外国語に興味があり入学を決めました。入ってみると、地域を深く理解する講義や地域の課題に取り組むボランティア活動が多くあり、当初の印象は変わりました。卒業した今、グローバルに学ぶことができる環境であるとともに地域に根差し開かれた大学であると実感しています。

大学での思い出は何かありますか？

一番の思い出はブラジルの伝統的なお祭り「Festa Julina」を仲間と企画し、キャンパス内で開催したことです。私はブラジルで生まれ浜松で育った日系ブラジル人です。「ブラジルのお祭りを大学でやることで、もっと地域の方々にブラジル文化を知ってもらいたい」との気持ちから立ち上げました。プロジェクトチームはSUACにしかできないことを考え、地域住民と外国人の交流の場となる内容にしました。パンフレット作成、出し物、予算管理、運営などをすべて学生たちが準備したので、うまくいかない事もありましたが、当日は自分たちの思いを形にすることができ、多くの来場者に喜んでいただけるイベントになりました。最後に仲間と号泣したことが今でも鮮明に記憶に残っています。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何でしたか？

日本語教員養成課程があることです。浜松市には日系ブラジル人をはじめ日本語の学習を必要とする外国人が多くいます。本課程はそうしたニーズに的確に答えていると思います。私も履修しましたが、授業の一環として中国、韓国、インドネシアの留学生に日本語を教える経験をしました。教える立場に立つことで、わかりやすい日本語とは何かを考えたこと、人前で話す訓練ができたことは大きな収穫でした。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

私は提携校ウェールズ大学トリニティ・セント・デイビッドへ短期留学しました。留学を経てTOEICのスコアが700点台から900点台に

伸びるなど、英語のブラッシュアップができました。しかし、それ以上に良かったのはアメリカ、カナダ、中国の留学生と交流できたことです。寮生活は文化の違いでぶつかり合うこともありました、話し合っ解決できたことは貴重な経験になりました。現在、海外営業部門に携わり、海外の方と英語で連絡を取り合い、時には現地に出張し会議を行います。大学時代に培った英語力と異文化への適応力が活かされていると感じます。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

これからも地域と連携した大学であり続け、他大学では例を見ないバイオニア的活動を継続することを期待します。教授との距離が近いからこそ、学生からの声が届きやすく、提案に対して大学側がすぐにサポートできる環境があります。今後も学生自らが発信できる環境作りとグローバル人材育成のためのカリキュラムが増えるといいと思います。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

大学生生活は掛け替えのない時間なので、積極的に沢山の経験をしてください。他学科の授業を受講したり、ボランティア活動をしたり、海外で異文化に触れたり、自分の視野を広げる絶好のチャンスを活かしてください。授業では受け身にならずに多くのことを吸収し、アウトプットをする事も大事だと思います。挑戦し、経験し、一步一步前進することで、可能性が開けてきます。



## 03

## 卒業生だより 茨城 俊太

Ibaragi Shunta

文化政策学部 文化政策学科 卒業  
入学年：2000年  
遠州信用金庫

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

「地域社会への貢献と実践型人材の育成」が基本理念でしたので、地元企業への就職に有利と考え、進学を決めました。就職活動の際には、地元産業界の支援もあり、多くの求人が大学へ寄せられていました。大学側から就職先の紹介をして下さることもあり、また、教職員の方々が親身になって就職活動の支援をして下さり大変励みになりました。就職に有利というイメージは入学前に想像していた以上のものでした。

大学での思い出は何がありますか？

ゼミやサークル活動などを通じて多くの良き友人を持つことができました。なかでも友人たちとの映画制作に参加し、協力して一つの作品を作り上げたことは貴重な経験でした。恥ずかしながら少し出演しましたが、それ以上に裏方の仕事としてスケジュール管理や部材の調達などを考えることが、思いの外、勉強になりました。講義がない日でも毎日大学へ通うほど充実した大学生活でした。今でも当時の友人とは、忘年会などで集まり近況を語り合っています。それぞれ様々な業界に進んでいるので、集まって話をすると見識を高めることができます。大学時代に築いた交友関係は一生の宝物になると思います。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何でしたか？

文化政策学科は社会科学全般を横断的に学べる学科でした。私は卒業後から現在まで地元の信用金庫で仕事をしていますが、金融を通じて地域社会をより良いものにするためには、一面的な視点（例えば経済的観点など）だけではなく、多様な視点で物事を考えることが大事だと思っています。卒業後は就職や進学と様々な道に進みますが、幅広く学んだことで、身に付けた知識を基礎として成長していくことができます。卒業後は、大学時代の4年間に比べ遥かに長い期間で様々なことを学ぶ機会があります。そのときにベースとなる知識を持っていることは、物凄く役に立つものだと思います。

大学全体の良いところは、教職員と学生、それから学生同士の距離が近いことだと思

います。卒業して16年経った今も当時のゼミの先生やゼミ生と連絡を取り合っています。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

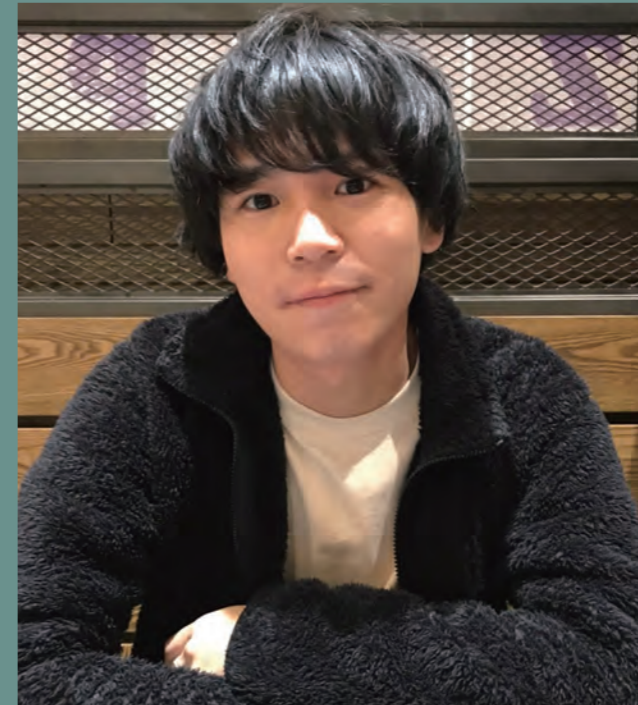
単に講義を聞いて試験を受けるという形式よりも、レポートや論文で汗を流し人前で発表するという形式の講義が多かったように記憶しています。プレゼンテーションの伝え方や文章や資料の作り方など、社会人として必要なスキルに結びついています。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

地域社会の行政機関や産業界などで活躍する人材を、今後も多く輩出されることを期待します。静岡県における大学生全体の地元就職率は約半分で、残り半分は県外へ流出しているそうです。静岡県内は産業が豊かで大きな受け皿があると思います。その時代に必要とされる人材ニーズを社会から読み取り、地域に人材を提供する役割を今後も一層高めていくことを期待したいです。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

様々なことを経験し多くの友人をつくることをお勧めします。勉学もちろん大事ですが、大学時代にしかできないことは沢山あると思います。仲間と共に色々なことに挑戦し、有意義な大学生活を送って下さい。

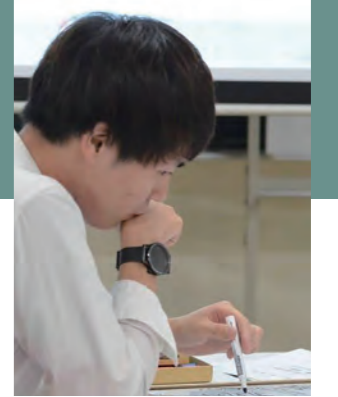


## 04

## 卒業生だより 鷺山 亮太郎

Washiyama Ryotaro

文化政策学部 文化政策学科 卒業  
入学年：2015年  
東京学芸大学 大学院教育学研究科  
総合教育実践プログラム



入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

浜松出身にも関わらず、近所にある何をしているかわからない大学というイメージしかありませんでした。高校への通学路の途中にあるとは思いませんでした。4年間を振り返ると本当に幅広く学問の門戸が開かれていたため、何をしたらと聞かれるとかえって答えに困ります。しかしさまざまな学問に触れ、自分を見つめることにつながったと思います。

大学での思い出は何がありますか？

碧風祭は本当に楽しい思い出です。部やサークルの仲間と打ち上げ代を贈うために出店をしたことももちろん楽しかったですが、運営から企画、装飾に至るまで、学生が中心となって碧風祭を「創り上げていく」雰囲気がとても好きでした。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何でしたか？

文化政策学科に限ったことではないですが、学生と教員の距離の近さは良いところだと思います。大学の規模も関係あるでしょうが、ゼミの先生だけでなく、学科や学部の垣根を越えて学生の企画の多くに様々な先生が関わっている姿を見てきました。それに学生と先生の関係性もフラットに近い印象です。そうした関係性は文芸大の特色だと思います。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

授業の内外でプレゼンテーションの機会が本当に多かった印象があります。おかげでとても鍛えられました。プレゼンテーション力を育てるためには場数を踏むことが必要不可欠だと考えていて、そうした機会に恵まれていたことは今の自分の学びに生かされています。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

在学中に一番不便に感じたことはWi-Fiの電波が弱いことと使う場所を選ぶことです。学生同士で話し合いなどをするとき空教室を使うことが多いのですが、そこにWi-Fiが入らず、苦心したことがあったので改善されると学生の活動もより活性化される

要素になるのではないかなと感じています。卒業後に「文明観光学コース」「匠領域」が新たに創設されたのですが、それらが文芸大に新しい風を吹かせ、長く続いていくことを期待したいと思います。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

よく大学在学期間を「人生の夏休み」と称します。このことについては賛否両論あると思いますが、僕自身はこれを悪くとらえる必要はないかなと思っています。有り余るくらい多くの時間を、勉強はそこそこにして、自分の気になることに費やしその分野の熟達者になってもらいたいです。それをやったからといって何なのだ、という大人な自分を一旦置いて、まずやってみてから考えることを大事にしてください。そして、そこでやったことや考えたことをいろんな人に話してみてください。できれば何か目に見えるものを持ちながら。意見の交流があると思考の枝葉が広がり、次の疑問がわいてきます。勉強で身につく知識や技能は自分の経験や思考を深めたり、発展させるために必要なものです。ですからまずはたくさん経験し、たくさん考えて、自分の興味を熟達させてください。皆さんのよき「夏休み」ライフを影ながら応援させていただきます。



05

## 卒業生だより 佐宗 沙織

Samune Saori

文化政策学部 芸術文化学科 卒業  
入学年：2000年

都内IT企業 勤務

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

高校生の頃、大学開学に向けての説明会に参加しました。いただいたパンフレットにキャンパスの完成予定図が載っていて、それを眺めながら大学生活に期待を膨らませながら入学式を待った思い出があります。ただし、1期生ということもあり漠然としたイメージしか湧かなかったように思います。入学後は良い意味で毎日が刺激的で、想像を越えて楽しい大学生活でした。

大学での思い出は何かありますか？

特筆すると…なんといっても碧風祭でしょう。1回目から2回目それ以降と毎年賑やかになっていったの年も楽しかった。今でも4年間分の写真を見返してみると、たこ焼きのブースをサークルの仲間と出したこと、ステージを興奮して楽しんだことなど思い出がよみがえってきます。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何でしたか？

魅力的な教授や学生が揃いに揃っていたと思います。みんな個性に溢れ、意見をはっきり言う。それでいてお互いを認め合うような

空気がいつもあって。1期生は何事も前例がなかった分、「何かをやってみよう！」という気概がとても高かったように思います。今思うと、大学の良いところはなんといっても「人」だったと感じます。20年経った今も出会いに感謝しています。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

大学卒業後12年間ほど美術館に勤めていました。美術史の授業やゼミで学んだことが、数えきれないほど仕事面で助けになりました。卒業後に学び足したこともたくさんありますが、やはり基盤は大学の中で得ることがで

きたと思っています。書籍、資料、ノートは何度も何度も参考にしましたし、今でも大切な宝物としてそばに置いています。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

10年先20年先も“地域発展”や“人の流れ”の起点となってもらえたらと思います。今後も公共団体や企業等と協働していただき、学生にとって魅力ある大学であってほしいと思います。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

少しでも興味を持ったことにはどんどんチャレンジしてください！様々なことを経験して、「未来の自分」にたくさんの可能性を与えてあげてほしいと思います。4年間は本当にあっという間です。色々な事を「ジブンゴト」と考え、大学生という時間を大切に過ごしてくださいね！

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

もともと映像や美術、演劇、音楽など、いろいろな芸術分野の歴史や文化について興味があったので、深く学んでみたいという気持ちがありました。入学してみると、専門領域だけでなく、異なる分野の授業も多く受けることが出来たので、様々な視点から芸術と地域社会について考えるきっかけになりました。

大学での思い出は何かありますか？

1年生の時に受けた写真の授業がきっかけで、「フォトコラージュ（色々な画像を切り貼りして合成する手法）」に興味を持つようになりました。空いた時間を見つけては趣味で制作していたのですが、2年生のときに授業で企画・運営した文楽イベントで、ポスターとチラシをデザインしたり、同じ学科の人達と構内のギャラリーで自主的に写真展を開いたり、自分の作ったものが学外の方の目に触れる機会を得られて楽しかったです。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何でしたか？

芸術文化学科では、いろいろな芸術分野や政策・マネジメントについて学ぶことが



06

## 卒業生だより 北島 夕真

Kitajima Yuma

文化政策学部 芸術文化学科 卒業  
入学年：2010年

静岡文化芸術大学 情報室 図書係



した。お世話になった図書館で再び働かせていただける機会を得られたので、在学時の経験を活かしながら、1つ1つの業務に対して真摯に取り組んでいきたいと思っています。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

SUACには実践演習のように、学部や学科の垣根を越えて意見を交換し合える授業や、自主的なプロジェクトが多くあり、学内の交流が活発だと感じていました。そうしたなかで、他学部の科目も単位に関係なく気軽に履修できる機会や、学年を超えて繋がる環境がさらに増えたら、興味・関心の幅がさらに広がり、互いに刺激し合って、より創造性の高いアイデアが生まれそうだと思います。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

自分にとって大学生活は、それまで知らなかった多くのものと出会えた貴重な時間でした。授業でもそれ以外でも、自分の心が少しでも動いたり、興味を持ったりしたことを掘り下げてみると、面白い発見や新たな疑問が生まれ、それが自分だけの研究テーマに繋がることもあるので、ぜひ好奇心を持って楽しんで取り組んでほしいと思います。

出来ませんが、講義で得た知識を活用する実践演習もあるところがとても魅力的だと思います。実際にイベントや舞台などを企画・運営することで、机上では見えなかった課題に気づくことが出来るので、次はこうしようという具体的なイメージが作りやすかったです。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

1年生からSUACの図書館でアルバイトをさせていただき、図書の配架や整理をするなかで、学部に関連する専門書や、貴重な資料に触れることができ、大学生活を送る上でとても有意義な時間を過ごすことが出来ま



07

## 卒業生だより 矢後 真由美

Yago Mayumi

デザイン学部 生産造形学科 卒業  
デザイン研究科 修了  
入学年：2000年  
株式会社Teable 代表取締役

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

入学前に大学の説明会に行ったので、そこで、こういう大学だ!というのはいたい理解できたように思います。私は、入学前、「プロダクトデザインを学びたい!」と思っていたので、それならば文芸大はすごくいいなあと、説明会に参加して思いました。また、開学初年度ということで、説明会ではこれからどんな大学になっていくのかという、希望やワクワク感を非常に感じましたね。それで、一期生という未知の可能性に興味がわきました。

大学での思い出は何かありますか？

大学2年生のときの、ニュージーランドでの語学研修です。苦手な英語を克服しようと思い、参加しました。私にとって初めての海外でした。英語での生活、旅先でのニュージーランドの大自然、外国での食事、初めてのことばかりでいろんなことが刺激的でした。海外の面白さや、視野の広がりを感じることができました。文政の友人ができたこともよかったです。

所属した学科（ないしは大学全体）の良いところは何かですか？

一番良かったと思ったのは、教授の方々との距離感が近かったことです。他の大学のことは知りませんが、きっと他の大学に比べて

近いと思います。私ほど、大学の教授とお酒をよく飲みに行ったり、一緒にツーリングして遊んだり、気軽に教授の部屋に何度も行っていた学生はいないはず。(笑)

そんな中で、教授のデザインに対する思いや生き方とか、大事にしている価値観、人生の楽しみとか、そんなことを沢山聞かせてもらえました。それが、その後の私の人生の選択に繋がったことは言うまでもありません。

大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

私の場合は、そもそも、文芸大に行ったからこそ、今の仕事ができているといっても過言ではありません。大学院での論文がきっかけとなり、起業することができました。

それから13年、増資や増床もすることができ、一応会社も少しずつ大きくすることができました。今思うと、大学での学びがあったからこそ、社会に出てからの、あのときの行動力やあのときの決断ができたんだと、改めて感じています。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

グローバルな人材の育成、アントレプレナーの育成、地域との連携推進を浜松からしていただきたいと思っています。そんな文芸大を卒業した人財と一緒に働くのが夢です。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

文芸大には、多くのチャンスが転がっています。自分がやりたい!と思ったことができるフィールドが文芸大を通して見つけられると思います。ぜひ、やりたい!と思ったことはすぐ行動してやってみてください。それがこれからの人生の糧になるのは間違いありません!応援しています!



08

## 卒業生だより 東田 祐治

Higashida Yuji

デザイン学部 生産造形学科 卒業  
入学年：2013年  
株式会社イトーキ  
商品開発本部 プロダクトデザイン室

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

じつは、SUACの存在を知ったのは高校3年生の夏くらいで、それまではいわゆる美術系大学をめざしていました。デザイン学部と文化政策学部という特殊な学部編成が印象的で、他の大学とは違う学び場に少し不安を感じつつ入学したことを覚えています。入学すると、デザイン学部以外の学生と交流することで、いろいろな価値観や考え方に触れることができましたし、設備が充実していることと市街地に立地していたので、環境面でも授業や作品制作に集中しやすかったです。

大学での思い出は何かありますか？

卒業制作をしていた時期のことはよく覚えています。毎週ゼミで教授からダメ出しを受けながらデザインを練って、浜松の地元の企業さんにお世話になりながら作品を作って、時にはゼミ仲間に手伝ってもらい何とか完成させました。社会人になると一つのことに没頭して取り組むことは難しいので、卒業制作を取り組んだ経験は貴重だと思います。



大学で学んだこと（授業でもそれ以外でも）で何かに活かされていることはありますか？

木材や金属、樹脂などの加工技術や、人間工学、UDなどを学べたことは今の仕事に大変役立っています。プロダクトデザインは最終的にモノでアウトプットするので材料や作り方の知識と、あらゆるユーザーの使用シーンを想像できる配慮を持っていることが大事と働き始めてから一層感じています。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

年々デザインの領域が広がり続けるなかで、十分なデザイン教育を4年間のカリキュラムに収めることは大変なことだと思いますが、私が在籍していた時と同じく、学生の創作意欲を支える温かい学び場であり続けてほしいです。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

学部や専攻にとらわれずいろいろな分野に興味を持ち挑戦してみてください。と言うと偉そうで恐縮ですが、自分が少しでもやってみたく感じたことはやってみて欲しいです。そしてうまく行かないときは同級生や先輩、教授や実習指導員、職員の方々に相談してみてください。



09

## 卒業生だより

# 櫻井 洋

Sakurai Hiroshi

デザイン学部 技術造形学科 卒業  
入学年：2000年

株式会社システム ES事業部

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

漠然とCG(コンピューターグラフィックス)を作成したいという気持ちがあり、学科の募集要綱を見てそれができると思い受験を決めました。新しくきれいな校舎で学べることも魅力でした。

入学してからはCGというよりは3次元CAD(コンピューターによる設計支援ツール)の授業が楽しく授業の課題に熱心に取り組んだのを覚えています。また、ものづくりの面白さも学び、結果的にはCGとは離れた道に進むことになりましたが、様々な授業で色々な道を模索できるのもこの大学の魅力なのではないかと思っています。

大学での思い出は何かありますか？

たくさんの思い出があり失敗ばかりしていたような気がします。演習の授業で羽が片側1メートルくらいある大きな手作り風車を作り、外に出したら風でものすごい勢いで回り始め止められなくなったことや、機構の授業で製作した動物型の模型は発表の場でうまく動かなか先生方に叱責をいただきました。そのような失敗経験はその後の人生においてとても役に立っています。

所属した学科(ないしは大学全体)の良いところは何でしたか？

私が所属していた技術造形学科は、運動力学の授業、CADの授業、材料力学の授業、統計学の授業等、仕事に直結する授業が多く、座学の他に実技でも金属加工、木材加工、CAM等を実際に体験することができ、仕事に必要な知識と体験が一通り

きました。当時は仕事に直結するとは思っていませんでしたが、社会に出てそれらの多くの経験が役に立ち、驚きました。入った会社の業務内容にもよりますが、私のような機構設計の仕事に従事する者にとっては、必要な知識が一通り学べるのが魅力と感じます。

大学で学んだこと(授業でもそれ以外でも)で何かに活かされていることはありますか？

ユニバーサルデザインの授業で視覚障害者体験をしたことがありました。当時は斬新な体験ではあったものの、これがこの先仕事に役立つのか、今一つ実感がありませんでした。

現在私は、大学で学んだCADの技能を活かし機構設計の仕事に就いていますが、色々な業務の中で、「テレビが聞けるラジオ(株式会社アステム製品)」という視覚障害のある方に向けた電子機器の開発に携わらせていただいたことがあります。製品の形状

を検討するにあたり、私は大学時代のユニバーサルデザインの授業を思い出しその経験を活かすことができました。ボタンの操作性や視認性において、使う人の立場に立ったより深い検討ができたと思います。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

企業、地域、と連携していただきこれからも開かれた大学として社会に貢献いただけることを期待しています。OBと学生が話せる場のような企画があればぜひ参加したいと思います。私自身そうでしたが、学生は高校や大学までの勉強や体験が、企業に入ってから仕事の仕様にどのように役立つかわからず不安を感じていると思います。これからも大学がそれらの架け橋になり続けていただくことを願います。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

大学時代は色々なことに挑戦してください。やりたいことをとことんやってほしいです。勉強はもちろんですが、趣味にも情熱を注いで良いと思います。私は趣味でマラソンをしていて、毎年浜松シティマラソンに出場しています。大学の横を通るコースですので、走り抜けていく時パワーをもらえる気がします。私もまだまだ挑戦をしている身です。皆さんに負けぬように頑張りたいと思います。

大学生活で学んだことが、これからの自分を形成するベースとなっていくと思いますので、今の時間を大切に、焦らず頑張ってください。

最後に、先生方、実習指導員の方、事務員の方々、友人や支えてくださるご家族に感謝の意を忘れずに、学生生活を存分に満喫してください。

大学での思い出は何かありますか？

学内外問わずいろいろな団体や取り組みに顔を出させてもらっていたため、その中で出会った人や経験はかけがえのないものです。特に…と考えましたが、たくさんありすぎて選べません(笑)バレーボール部やOmnis Design Groupのサークル活動で出会ったユニークな友達、宮田ゼミであーだこーだ言いながら制作に励んだこと、TOKYO DESIGN WEEKで他大学のデザインを学ぶ学生と関わったこと、碧風祭の目玉企画で映像パフォーマンスをやったこともありました。社会人になるとなかなかできない、使い方を自由に選べる時間があり、やりたいことをやれる環境があったからこそ、様々な経験や価値観に触れることができたことが、大学生活4年間の思い出です。

所属した学科(ないしは大学全体)の良いところは何でしたか？

学科はほんとうに居心地が良かったです。趣味や考え方が似ている人も多くて、用がなくても演習室に行っていました。個性的な人も多く、制作物も面白いアイデアのものをみんな作ってくるため、制作発表のときはよく笑いが起きていてとても楽しかったです。自分にはない発想がたくさん出てきて刺激的でした。

10

## 卒業生だより

# 成瀬 史織

Naruse Shiori

デザイン学部 メディア造形学科 卒業  
入学年：2013年

株式会社 ON



入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

漠然とCG(コンピューターグラフィックス)を作成したいという気持ちがあり、学科の募集要綱を見てそれができると思い受験を決めました。新しくきれいな校舎で学べることも魅力でした。

入学してからはCGというよりは3次元CAD(コンピューターによる設計支援ツール)の授業が楽しく授業の課題に熱心に取り組んだのを覚えています。また、ものづくりの面白さも学び、結果的にはCGとは離れた道に進むことになりましたが、様々な授業で色々な道を模索できるのもこの大学の魅力なのではないかと思っています。

大学で学んだこと(授業でもそれ以外でも)で何かに活かされていることはありますか？

宮田先生のインターフェースデザインという授業で、ユーザー視点でデザインを考えることの面白さを知ったことが、自分の一つの分岐点だった気がします。UIデザインに興味を持ち、複数の企業のインターンにUIデザイナー志望で参加しました。インターンでも、宮田先生に教わった手法は大変活かされました。卒業

後、大手メーカーのUIデザイナーとしてキャリアをスタートすることができました。

現在は、メディア会社のweb/アプリ周りのデザインを一手に引き受けていて、web、アプリのUIだけでなく、印刷媒体、映像編集、撮影など、クリエイティブの何でも屋みたいになっています。大学では、UIとグラフィックを中心に制作をしていましたが、基本的なデジタルクリエイティブの表現手法やデザイン理念を幅広く学ぶ機会が多くあり、制作も複合的に行っていました。それが今、様々なクリエイティブに対応できる武器になっていると思います。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

今後デザインの重要度は高まっていく一方で、地方発信のクリエイティブはもっとも増えると思います。浜松という地だからこそできる、質の高いクリエイティブを発信していってほしいです。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

文芸大は「やりたい」と思ったことは叶えられる環境だと思います。いい意味で「自由」だと思います。ぜひ「やりたい」をたくさんやって、充実した大学生活を送ってください。



11

## 卒業生だより 小澤 一也

Ozawa Kazuya

デザイン学部 空間造形学科 卒業  
入学年：2000年

KAZUYA OZAWA STUDIO (木匠家)

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

大学周辺も都市開発がこれからという時で、更地が多くつべらとしていましたが、そんな中にある大きく波うった建築物が、18の自分にはとても新鮮で印象的でした。建設中の大学を眺めながら様々な思いを抱きました。入学直後は全てが新しすぎて、さぐりさぐりという感じで、1学年で学生も少なく静かな学内だった印象があります。

大学での思い出は何かありますか？

4年生の時、卒業制作が行き詰まって振り出しに戻って困り果ててる時に、友人にちょっと話があるとファミレスに呼ばれました。二人対面で何かと思ったら、碧風祭(文化祭)で椅子を作って売ろうと言われた。はあ？それどこじゃない、ムリだよと言ったが、熱意に推されてやることになりました。夜な夜なデザイン考えて、模型作って検討しました。コストを抑えるために脚部は合板を使うが、体が触れる座面と背もたれは無垢材にしたいのだがどうしようという時に、課題でお世話になっていた材木屋さんのお客さんから、焼肉屋のテーブル天板の端材を提供していただけることになりました。端材といっても座面が取れるほどの大きさで、しかもピンギョウという高級材を手に入れることができました。本当にありがたい。制作は近い友人に手伝ってもらい、木工、金工、塗装と施設をフル活用させてもらい、前日の夜になんとか6脚の小さな椅子を完成することができました。文化祭は2日間。売ってくれないと制作費が返せないと必死

でしたが、運よく売ることができて本当にほっとしました。

所属した学科(ないしは大学全体)の良いところは何でしたか？

自分にとってはやはり工房が充実している所でした。作りながら考える事ができたことはとても恵まれていました。設計室と工房を行き来するスタイルはここで培われたと思います。建築から入り、次第に家具に興味を持ち始めたこともあり、学科を超えて様々な先生にお世話になりました。1年の素材加工演習では様々な素材を扱いますが、とりわけ木工に惹きつけられました。木が大好きな先生で、それ以来木の話はもちろん、自分の方向性や課題の事など、様々な相談をさせていただきました。先生の中でも作家やアーティストの方もおり、デザインと表現のところで、どうしてもストレスが生じる人がぼく以外にもたくさんいると思

いますが、親身になっていただき心の支えになりました。

大学で学んだこと(授業でもそれ以外でも)で何かに活かされていることはありますか？

建築の設計課題に成果を出せず、工房で家具制作にのめり込んでいたある時、先生に研究室に呼ばれました。この人知ってる？とテーブルの上に置かれた本は、ジョージ・ナカシマという日系アメリカ人の木工家の展覧会図録でした。そこには、それまで見てきたデザインプロセスからできる家具とは異なる、木と向き合い、素材との対話の中から生まれる家具と生き様がありました。ぼくは釘づけになってしまいました。先生はその木工家の娘さんと親交があったのです。しかしその本はもう販売されていない。先生も思い出のものなので、どうしても譲ることはできない。すぐに図書館に行ってカラー印刷しました。今の仕事をする大きなターニングポイントとなりました。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

素材な思いを大切に、長く研究心をもって発信することです。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

そもそも何をやりたいのかということが一番考えた時期だったように思います。物にもならず、達成感も充実感もなく、それでも何かと悩んだ時期でした。でもこの時があって、今日の制作につながっています。何度も思いですが、ほんと作って(やっ)てみなければわかりません。がんばってください。



12

## 卒業生だより 原 空也

Hara Kuya

デザイン学部 空間造形学科 卒業  
デザイン研究科 修了  
入学年：2014年

ジェイアール東海建設株式会社 建築部

入学前はどのような大学だと思っていましたか？  
そしてそれは入学後に変化がありましたか？

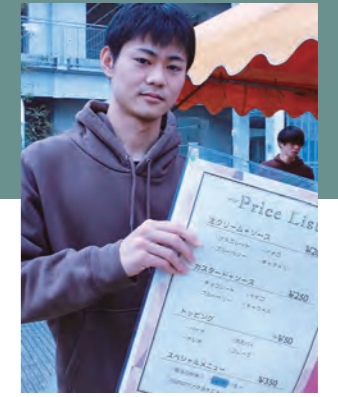
大学の名前の通り文化と芸術に特化した大学だと思っていました。入学して各分野に特化された教授の方々から学ぶことは多くありました。一方で思っていたよりも他の学科や学部と関わる機会が多かったです。サークルや学生主体のイベントはもちろんのこと、他の学科との合同で行う授業もあり、3つの学科で構成された大学ならではの授業だと思いました。他の学科や学部の生徒と関わることは結果的に自分の視野が広がる良い機会でした。

大学での思い出は何かありますか？

趣味の合う友人とひたすら話したり、サークルの仲間とくだらないことで盛り上がりたり、大学生でできない時間の使い方をしていたことを今でも思い出します。目的や目標を持って行動することも大事ですが、くだらない時間が心を豊かにすることもあります。案外、楽しかった思い出は友人や仲間との意味もない時間ばかりです。

所属した学科(ないしは大学全体)の良いところは何でしたか？

様々な将来の目標を持った人が集まっていたことです。設計、インテリア、ゼネコンなど



に対しての能力や取り組み方はどのような仕事に対しても通用します。会社でもどのような仕事が任せられても対応していくことができているのは大学で学んだデザインの力だと思います。

これからの静岡文化芸術大学に期待することはありますか？

地域に根ざした大学であり続けることで、国際的な活動に注目されがちですが、地域の地域に対しての学生の活動も大変素晴らしいものが多くあります。学生が自ら進んで活動しやすい環境を整えればより一層、多くの学生が社会で活躍してくれるのではないのでしょうか。地域に寄り添うことで遠州という地域とともに発展し続ける大学であることを期待します。

これから本学で学ぶ後輩たちに向けて何かエールをおくってください！

静岡文化芸術大学はやりたいことはあるけどどうしていいかわからない。何かやりたいけど何していいかわからない。という人に対して支援してくれる大学です。無理に学ぶ必要はなく、目標を目指す中で学びは勝手についてきます。やりたいことを恐れることなく大胆に行動していきましょう。



# History 20年の軌跡

開学前	
1994 平成 6年 8月	新大学構想検討委員会が発足
1995 平成 7年 9月	静岡県議会で「新大学整備基本構想」を公表
1996 平成 8年12月	校舎基本設計を発表
1997 平成 9年 6月	大学名を「静岡文化芸術大学」と決定
1998 平成10年 3月	静岡文化芸術大学設立準備財団を設立
1999 平成11年12月	学校法人静岡文化芸術大学を設立
2000 平成12年 3月	校舎竣工



竣工した校舎

学校法人 静岡文化芸術大学	
2000 平成12年 4月	開学(開学式、入学式を挙げる)
2001 平成13年 5月	キャリア・オフィスを設置
2003 平成15年10月	天皇、皇后両陛下が本学をご視察
平成15年12月	静岡文化芸術大学同窓会を設立
2004 平成16年 4月	大学院(文化政策研究科、デザイン研究科)開設
平成16年 4月	静岡大学情報学部との単位互換制度を開始
2005 平成17年 3月	湖西大(韓国)との交流協定を締結
2006 平成18年 4月	デザイン学部技術造形学科をメディア造形学科に名称変更
2007 平成19年 2月	上海工程技術大学(中国)と交流協定を締結
平成19年 3月	フィンドレー大学(アメリカ)と交流協定を締結
平成19年 4月	静岡国際オペラコンクール事務局を本学内に設置
2008 平成20年 9月	ウェールズ大学トリニティカレッジ・カマーゼン(イギリス)と交流協定を締結
2009 平成21年 8月	浙江大學城市学院(中国)と交流協定を締結



開学式



天皇、皇后両陛下が本学をご視察

公立大学法人 静岡文化芸術大学	
2010 平成22年 4月	学校法人から静岡県設立の公立大学法人へ移行
平成22年10月	創立10周年記念式典を開催
2011 平成23年 6月	スズキ奨学基金を創設
2013 平成25年 4月	英語・中国語教育センターを開設
平成25年 4月	ブルゴーニュ大学・国際フランス語センター(フランス)との交流協定を締結
平成25年 6月	アイルランガ大学(インドネシア)との交流協定を締結
平成25年 9月	静岡文化芸術大学 学術リポジトリ(SUAC AR)の運用を開始
2014 平成26年 3月	書籍「静岡文化芸術大学10年史」発行
平成26年 4月	ポーロニャ大学(イタリア)と交流協定を締結
2015 平成27年 4月	デザイン学部3学科をデザイン学科1学科に再編し、新たに5領域を設定
平成27年 7月	イズミル経済大学(トルコ)と交流協定を締結
平成27年12月	静岡文化芸術大学生生活協同組合を設立
2016 平成28年12月	国立台湾師範大学(台湾)と交流協定を締結
2017 平成29年 4月	静岡文化芸術大学基金を設立
2018 平成30年 4月	フェアトレード大学認定(アジア初)
平成30年 4月	サザンクロス大学(オーストラリア)と交流協定を締結
2019 平成31年 4月	文化政策学部「文明観光学コース」、デザイン学部「匠領域」を設置
令和 1年 6月	コートダジュール大学・SDS(フランス)と交流協定を締結
令和 2年 8月	ダッカ大学現代言語研究所(バングラデシュ)と交流協定を締結
2020 令和 2年 4月	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、前期講義を遠隔方式で実施
令和 2年10月	ウダヤナ大学(インドネシア)と交流協定を締結
令和 2年10月	国立高等装飾美術学校(フランス)と交流協定を締結
令和 2年10月	静岡文化芸術大学デジタルアーカイブの運用を開始



創立10周年記念式典



英語・中国語教育センター開所式



フェアトレード憲章発表(2017年7月)

## 静岡文化芸術大学基金について

静岡文化芸術大学では、学生の留学、学生や教員による地域貢献支援をはじめ、国内外の学会等における研究発表奨励を含む本学ならではの事業を充実し、地域の未来を共に拓いていくため、静岡文化芸術大学基金を設置いたしました。皆さまにおかれましては、本基金の趣旨をご理解いただき、格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

### 基金の活用

お寄せいただいた寄附金は、下記の基金に充当し、本学の教育や研究の充実のために有効に活用させていただきます。

### 修学支援事業基金

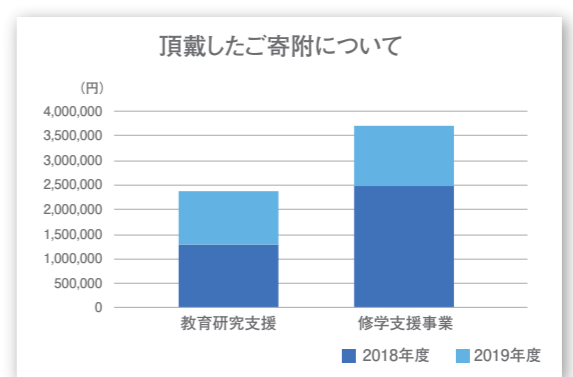
学生の経済的負担の軽減を図ります。

- 学生の授業料、入学金の全部または一部の免除
- 学資金の貸与または支給
- 海外留学費用への支援
- 学生の資質向上を目的とする本学による学生の雇用

### 教育研究支援基金

本学における学生支援(修学支援事業に係るものを除く)、教育、研究、社会貢献及び国際交流に関する活動等の推進及び施設環境の整備充実を図ります。

- 学生の活動への支援
- 学術研究活動への支援
- 社会貢献活動への支援
- 国際交流の推進



歴代理事長	歴代学長
 石川 嘉延 1999年12月就任	 川勝 平太 2009年9月就任
 有馬 朗人 2010年4月就任	 木村 尚三郎 2000年4月就任
 川勝 平太 2007年4月就任	 熊倉 功夫 2010年1月就任
 横山 俊夫 2016年4月就任	

有馬朗人理事長は  
令和2年12月6日に  
逝去されました



本学は、浜松ならではの教育研究に対する  
有馬先生の熱い思いを受け継ぎ、  
歩みを進めてまいります。

有馬先生は、偉大な科学者であり、詩人であり、教育家であり、そして警世の人でもありました。  
先生と語らう機会があった人はみな、心ごみ、生きるよろこびを感じたものです。

遠州浜松をこよなく愛され、また世界の行方を案じてやまれることなく、平成22年に本法人の理  
事長に就任されてからは、文化政策とデザインの両学部の連携が生み出す本学の個性を、地域  
そして世界に輝かすべく、的確な舵取りをなさいました。

ここに、有馬先生への感謝の気持ちをあらたに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

静岡文化芸術大学学長 横山 俊夫

## 有馬 朗人 (ありま あきと)

学 歴	
昭和23年 3月	旧制浜松第一中学校(現・浜松北高)を 4年修了で旧制武蔵高等学校へ飛び入学
昭和28年 3月	東京大学理学部物理学科(旧制)卒業
昭和33年 8月	東京大学理学博士

職 歴	
昭和31年 4月	東京大学原子核研究所助手
39年 8月	東京大学理学部助教授
46年 1月	ニューヨーク州立大学ストーブルック校教授
50年 6月	東京大学理学部教授
平成 元年 4月	東京大学総長(平成5年3月まで)
5年10月	理化学研究所理事長(平成10年5月まで)
10年 7月	参議院議員(平成16年7月25日まで)
	文部大臣(平成11年10月まで)
11年 1月	科学技術庁長官兼務(平成11年10月まで)
12年 6月	財団法人日本科学技術振興財団会長
16年 7月	科学技術館館長
18年 4月	武蔵学園学園長
22年 4月	公立大学法人静岡文化芸術大学理事長

受 賞 歴	
昭和53年12月	仁科記念賞
平成 2年 5月	フランクリン・インスティテュート ウェザリル・メダル(アメリカ)
5年 4月	アメリカ物理学会ボナー賞
6月	日本学士院賞
10年 6月	レジオンドヌール勲章・オフィシエ(フランス)
14年 9月	名誉大英勲章
16年11月	文化功労者
	旭日大綬章
21年 1月	中国科学院国際科学技術協力賞
9月	国家友誼賞(中国)
22年11月	文化勲章



未来へつなぐ知と実践  
**SUAC20**

静岡文化芸術大学創立20周年記念誌  
未来へつなぐ知と実践  
知の拠点であり続けることを基礎に  
地域へ、世界へ  
2021年3月1日発行

編 集：静岡文化芸術大学 20周年記念事業 学内推進委員会  
アーカイブズチーム

発 行：静岡文化芸術大学 〒430-8533 浜松市中央区中央2-1-1  
印 刷：中部印刷株式会社

